

Faculty

第 6 回 FD 研修会報告書

2009. 9

Development

FD 委員会

金沢学院短期大学

目 次

開催にあたって	学長	石田 寛人	・・・ 1
I. FD 委員会活動報告		岡島 厚	・・・ 3
II. 保健室からみた学生の現状と対処について		澤村 明美	・・・ 9
III. なんでも相談室からみた学生の状況について		石村 順子	・・・ 15
IV. 支援を必要とする学生への対応について		木村 敦子	・・・ 23
V. 第6回 FD 研修会質疑応答			・・・ 33
閉会の辞 総括	FD 委員長	岡島 厚	・・・ 39
資料1 平成21年度前期 授業改善のための学生アンケート集計結果			・・・ 41
資料2 第6回 FD 研修会 参加者アンケート集計結果			・・・ 51

「FD研修会に思う」

学長 石田 寛人

FD活動は、極めて広範多岐にわたるが、これを、「教員が教育内容・方法を改善し、向上させるための取り組み」とするならば、それは、昔から、教育がある限り行われてきたことである。いかによく教えるか。後進を育て導く者にとって、これは千古変わらぬ課題である。

本学の前身たる金沢女子短期大学や金沢大学で英語の教員をしていた私の父は、出席に極めて厳しい教授だった。ある時、父の厳格さへの苦情めいたものを聞いた私は、そのことを父にもらしたら、「これが自分の英語教育だ。余計なことを言うな」と怒鳴りつけられた。父も一教師として、書き込みがしやすい教科書を使うなど、授業改善に懸命に工夫していたのだった。もっとも、それが結果につながったかどうかは、当然ながら、教え子たる卒業生の英語を聴かなければ分からないが、そのチャンスにはまだ遭遇していない。

とまれ、少なくとも、父の英語は私より数段上であった。教える者としての私の力は、遠く父には及ばない。ただ、我々は、父の時代と違って、FD活動なるものに懸命に取り組んでいる。それは、教員個人の努力に加えて、「組織的な」取り組みが行われていることに特徴がある。

本学は、教員全員の熱心な努力により、FD研修の場を定期的に持ち、それぞれの現場での事例を紹介し、経験を交流して、研究を深化させ、それを現場に還元してきた。まさによく教えるための活動を組織化してきたのである。これをさらにおし進め、その成果によって、学生たちにさらにためになる授業を提供し、豊かな教室をつかっていきたいと願っている。

ただ、私は「提供」という言葉を、あまり用いたくない。教育とは、先人から後輩に対する智恵と知識の灯火の伝達であり、商品を提供するのとはまた違った優れて精神的な活動である。組織的なFD活動が、そのようなことをも意識して進められることを強く期待しており、私もそのために力を尽くしたい。



FD 委員会活動報告

FD 委員長 岡島 厚



平成20年度FD活動の取組み報告

本学のFD活動が本格的に始動始めたのは平成18年からで、第一回短大FD部会(2006.10.6)で次の9つの実施検討項目を掲げ、そのうち

- (1) 新教育理念のカリキュラムへの具体化⇒創造科目の開設・充実
- (2) 各学科・コースにおけるアドミッション・ポリシー(求める学生像)の制定
- (3) アドミッション・ポリシーに沿ったカリキュラム体系の改善

は、付図に示すように、一応実施済みである。

今日多くの大学において、アドミッション・ポリシー(入学者受入れ方針)、カリキュラム・ポリシー(教育課程編成方針)、ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)という3つのポリシーを定めているが、本学では上記(2)、(3)によって既に検討し、ホーム・ページ、入学案内などで公表している。しかし、さらにわかり易い形で公開するように改善する必要がある。

そして平成20年度取り組んだFD活動の主な内容は、次の7項目である。

1. 学期ごとの学生による授業評価アンケートの継続的实施

⇒平成18年後期に試行実施の後、平成19年度から年2回、学期ごとに実施して、その結果は、各教官に報告し、同時に短大全体の概要は短大ホーム・ページ、研修会報告書に掲載し、公開している。

2. 授業評価と連動したFD研修会の定常的な実施と報告書の刊行

⇒平成18年度後期から年2回、学期ごとに実施し、その報告書の刊行している。また、報告書は短大ホーム・ページに掲載し、公開している。

3. 本学に相応しいGPA(Grade Point Average)システムの検討

⇒平成20年度から試行実施中である。

4. 卒業生(卒業時を含む)による本学教育の達成度や満足度を評価する評価システムの企画・実施

⇒卒業時アンケートは平成18、20年度実施し、その結果は研修会で報告し、同時に研修会報告書に掲載している。一方、卒業生アンケートは卒業生の実態調査を開始している。

5. 初年次教育の充実を図る仕組みの策定

6. 本学の教育理念の具体化:教育指針の1つである「良識と礼節」を学生に日常的に植え付ける取組み

⇒平成20年度から大乘寺坐禅研修を実施し、その報告書を刊行している。

7. 教員相互の授業参観

⇒平成21年度から実施している。その報告書は、当該の授業担当者に報告すると同時にFD委員会では保存している。

FD活動の取組み

現在、取り組んでいる主なFD活動の内容は、次の7項目である。

1. 学期ごとの学生による授業評価アンケートの継続的实施
➡平成18年後期に試行実施の後、平成19年度から年2回
毎学期実施。結果の概要は短大ホーム・ページ、研修会報告書
に掲載公表。
2. 授業評価と連動したFD研修会の定常的な実施と報告書の刊行
➡平成18年度後期から年2回、学期ごとに実施、報告書の刊行。
報告書は短大ホーム・ページに掲載公開。
3. 本学に相応しいGPA(Grade Point Average)システムの検討
➡平成20年度から試行実施中。
4. 卒業生(卒業時を含む)による本学教育の達成度や満足度を評価する
評価システムの企画・実施
➡卒業時アンケートは平成18、20年度実施。
結果は研修会で報告、研修会報告書に掲載。
卒業生アンケートは卒業生の実態調査を開始。
5. 初年次教育の充実を図る仕組みの策定
6. 本学の教育理念の具体化：教育指針の1つである「良識と礼節」を学生に
日常的に植え付ける取組み
➡平成20年度から大乘寺坐禅研修を実施、報告書刊行。
7. 教員相互の授業参観
➡平成21年度から実施、報告書(保存)。

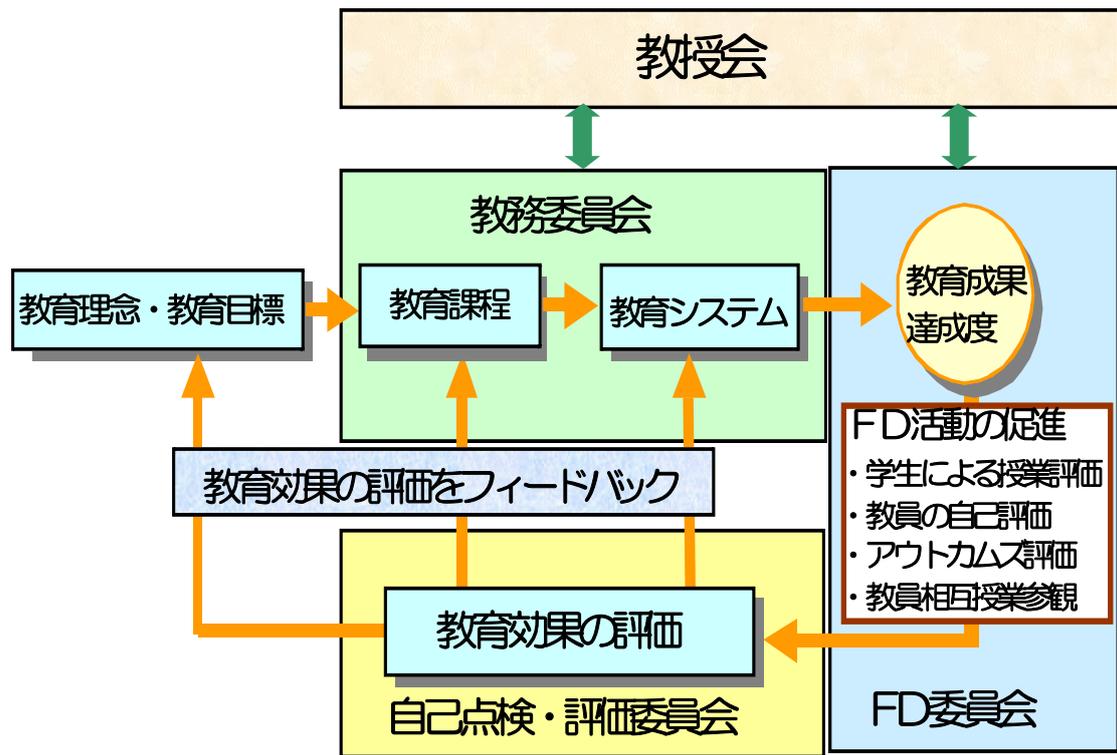
短期大学のアドミッションポリシー

ライフデザイン総合学科のアドミッションポリシー

ライフデザイン総合学科では、生活文化に関心を持ち、「日本文化&観光」「ビジネス&コミュニケーション」「フード&ウェルネス」「カラー&ビジュアル」「アパレル&ファッション」「スペース&インテリア」の各分野から「好き」「興味ある」ことを見つけ、学び、伸ばし、深めたいと思っている人を歓迎します。そして、それぞれの分野で得意な技を身につけ、磨き、自らデザインした生き方で社会に貢献することを目指す人を求めています。

食物栄養学科のアドミッションポリシー

食物栄養学科は、将来、栄養士さらに管理栄養士として活躍する栄養と健康のスペシャリストを養成します。好奇心にあふれ、食べものと健康に関心のある人、そしてバランスのとれたおいしい食事を科学的に創造し、食を通して国民が健康増進にたずさわる人を求めています。



授業改善のためのPDCAサイクル

授業評価アンケート結果などFD研修会で検討した教育評価結果を実際の教育現場にフィードバックするために、教務委員会、FD委員会、そして自己点検評価委員会は、図に示す関係をもって活動している。

保健室からみた学生の現状と対処について

澤村 明美



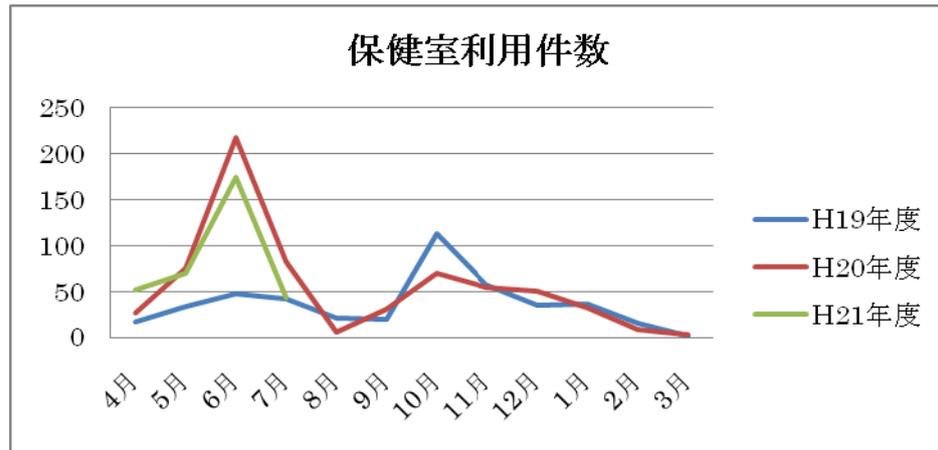
保健室からみた学生の現状と対処について

1. 最近の保健室での出来事から

保健室での出来事から、心理的な問題で保健室を訪れる学生の状況の一端について説明した。

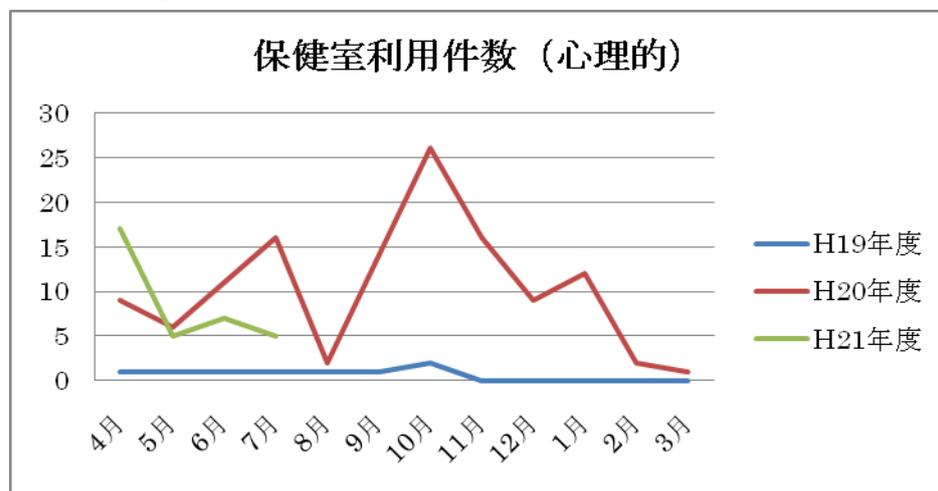
2. 短大生の保健室利用状況

(1) 過去2年余の利用状況



6月・10月に利用件数増加が見られる。6月の利用件数は、健診後の結果返却のため増加している。(H19年度は健診結果返却を集計に含んでいない。)

その内、心理的な問題での利用件数は下記グラフのとおりである。



4月は、友達ができない、教室に入れない、科目登録の方法がわからないなどといった相談が多く、実質2週間の利用期間(学生・教職員の健診期間が約2週間あるため)に上記件数の利用があると考え、やはり利用者の多い時期と推測される。7月は初めての定期試験を控えての不安などでの来室、10月は前期利用者に新たな利用者が加わり利用者増が見られる。(延件数のため利用者実数とは異なる。)

(2) 今年度入学生の健康個人カードの記載から

健康個人カードの「定期的に服用している薬」の項に、SSRIなどの薬の名前を記載したものが昨年より多く見られた。

3. 保健室で関った心理的問題に関連すると思われるもの

人間関係の問題： 友人ができない、うまく話せない

“便所飯”の気持ち ・友達がいない人と思われたくない

・一人で食事しているところをクラスの人に見られたくない

・保健室で食事していいか

過呼吸発作

自傷行為

摂食障害

不登校 入学後の不登校 — 高校までの不登校

無気力

家族関係の問題

発達障害・学習障害

精神科関連の疾患を伴うケース

保護者からの相談

4. 学生との関りから感じること

(1) 学生の姿に

人間関係が希薄 相手の気持ちを推測だけで「きっと～だろう」と決めてしまう傾向
気づかい過ぎ — 気づかな過ぎ

表現の少なさ 語彙の少なさ

自己評価の低さ

抱える問題やその背景が複雑

決めて欲しい・指示して欲しい

(2) 保健室と相談室に求めるものの違い

保健室：相談室に行くほどのことでない

自分はおかしくない（異常ではない）

いつでも聴いて欲しい

なんだかモヤモヤ

保健室の役割：インテーカーとしての役割

身近なおとな

連携のいとぐち

(3) 学生と対応する上での課題

・クラスアドバイザー、相談室、保健室はもちろん、全教職員で学生をサポートするという共通認識

・連携方法の模索

6. 過換気（過呼吸）発作とその対処

（1）過換気（過呼吸）症候群とは

特定の病気ではなく、下記のような状態をいう。

- 症状：急な息苦しさ、動悸、胸部圧迫感、めまい、口唇周囲や手足のしびれや手足のつっぱり感、頻脈、時に痙攣や意識障害 など

- 発症のメカニズム：
不安・恐怖・疼痛などがきっかけとなり、速い呼吸を繰り返す（過換気・過呼吸）
→ 血液中の二酸化炭素濃度が減少し、血液の pH がアルカリ性に傾く（呼吸性アルカローシス） → 上記症状が出現
*時に、運動が引きがねとなり、運動直後におこすこともある。

- 持続時間：数分～数十分

（2）対処

①発作時の対処法

・ペーパーバッグ法

本人を楽な姿勢で休ませ、紙袋を口・鼻にあて呼吸させる。

（紙袋は完全に密着させると低酸素になることがあるので、少し隙間をあける）

気持ちを落ち着かせるよう声をかける。

ゆっくり腹式呼吸を促す。

*顔色・爪の色・唇の色が不良（青紫色）の場合は行わない。

*発熱や咳・たんを伴う場合は、受診。

②日常生活上の注意

・腹式呼吸法や自律訓練法の習得

・日頃から自分なりのストレス解消法をみつけ、ストレスを貯めないようにする。

③状況によっては相談機関・医療機関へ繋ぐ

なんでも相談室からみた学生の状況について

石村 順子



なんでも相談室からみた学生の状況について

1. はじめに

2003年に開設されたなんでも相談室は、大学・短大・高校の三学一体の学生支援室である。月曜日から金曜日までの午後、週5日開室している。

外部から招いた専門カウンセラーと三学の教職員がスタッフとして配置されており、今年度は開設7年目となる。

2003年4月の開設当初から、今年2009年7月に至るまでの利用状況と学生支援を振り返りながら、学生相談の業務を省みることにする。

2. なんでも相談室利用状況について

(1) 年間利用者数推移



図1は年間利用者のべ数のグラフである。年間利用者数は他の年度と比較して2007年度と2008年度に急増している。これは、面談回数が特に多い学生や面談を継続する学生が増加したことによる。面談を10回以上継続する学生は2007年度には2人いたが、その内の1人は面談が60回に及んでいる。また、2008年度には10回以上の面談者が6人おり、例年の1人～2人を大きく上回った。

2009年のグラフ値は表示していないが、4月～7月までの利用者のべ数は、すでに158人である。10回以上の面談者は5人いる。この5人は全員女子学生である。

(2) 月別利用者数推移

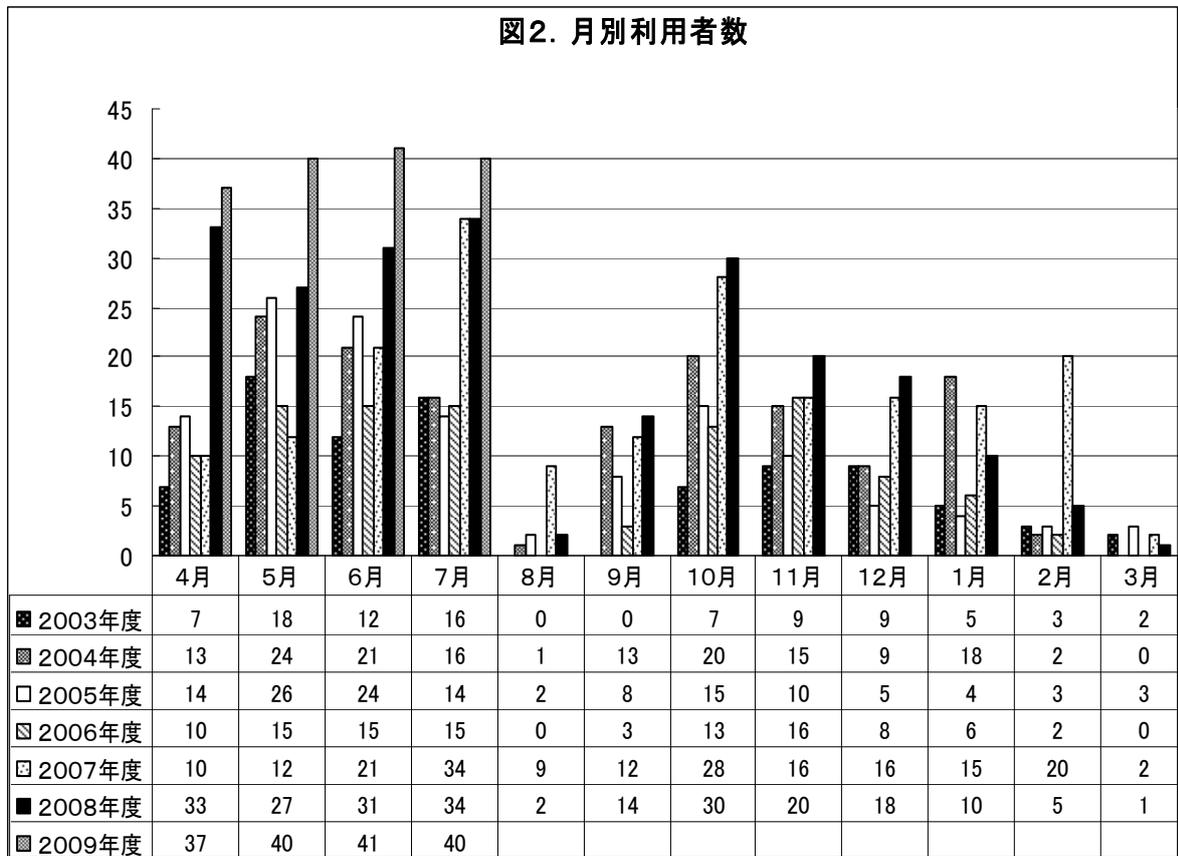


図2は月別利用者のべ数のグラフである。年間を通じて、4月から7月までと夏休み明けから10月にかけての期間に増加の傾向がある。同様に、澤村明美先生が発表の中で、4月の「保健室利用件数（心理的）」増加を指摘されている。また、木村敦子先生も大学生の問題の特徴のひとつとして、説明の中で「大学環境（大学のスケジュールにより4～5月や10月ごろの相談が多い）」と話された。

4月の年度初めは、新入生には生活環境の変化や勉強スタイルの変化、新しい人間関係などが大きなストレスとなり、在生学生には新規の授業や今後の進路決定などがストレスとなる。また、夏休み明けの学生の中には休暇中の生活習慣の切り換えや授業へのスムーズな適応ができず、面談に来る学生が増加すると考えられる。

つぎに、4月のグラフには2008年から変化が見られる。2007年度までは徐々に増えていった面談が、2008年と2009年には4月の開室早々から多くの利用があった。4月中は少なかった新入生の来室も増えている。これは、中学校や高校で不登校となりカウンセリングや相談室を利用した経験を持つ学生や、入学当初から問題を抱えている新入生が抵抗なく相談室を利用するためと思われる。

(3) 男女別割合

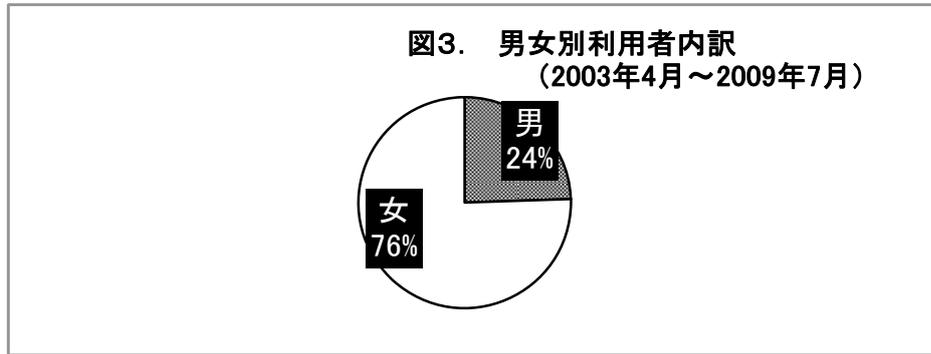


図3は男女別利用者内訳のグラフである。女子学生の利用が圧倒的に多かった。一般的に女性の方が他者に相談しやすい傾向があり、それが反映された結果であると考えられる。

(4) 校種別利用者数

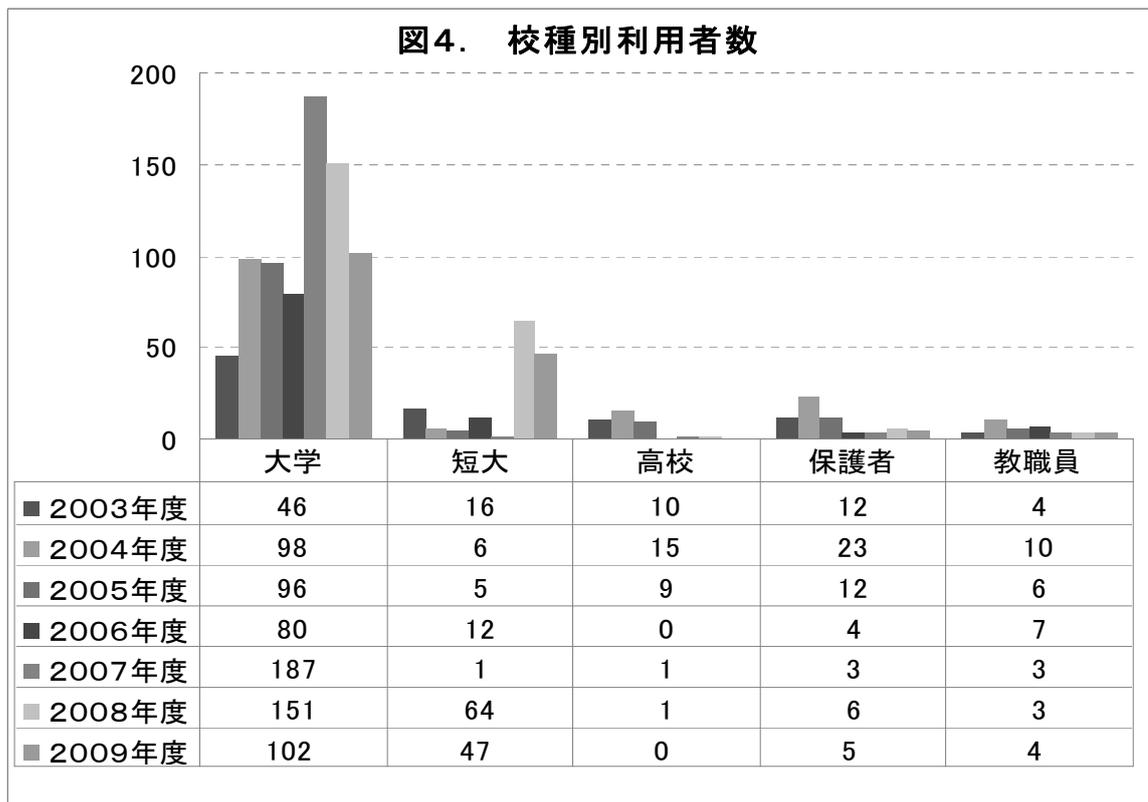


図4は校種別利用者のべ数のグラフである。グラフ全体の中では学生数に比例して大学の利用は多くなっている。短大は2003年度～2007年度までの利用者のべ数平均は8人だったが、2008年度はのべ数64人に、2009年度は7月の前期終了までに47人と増加している。教職員は少数であるが毎年利用がある。教職員が対応する学生との問題に苦慮をしないで、気軽に利用できる相談室にしていけるようさらに努力を重ねていきたい。高校と保護者の利用が2006年度から減少しているのは、石村が高校を退職し大学と短大を中心とした面談になったからである。

(5) 学年別利用者数

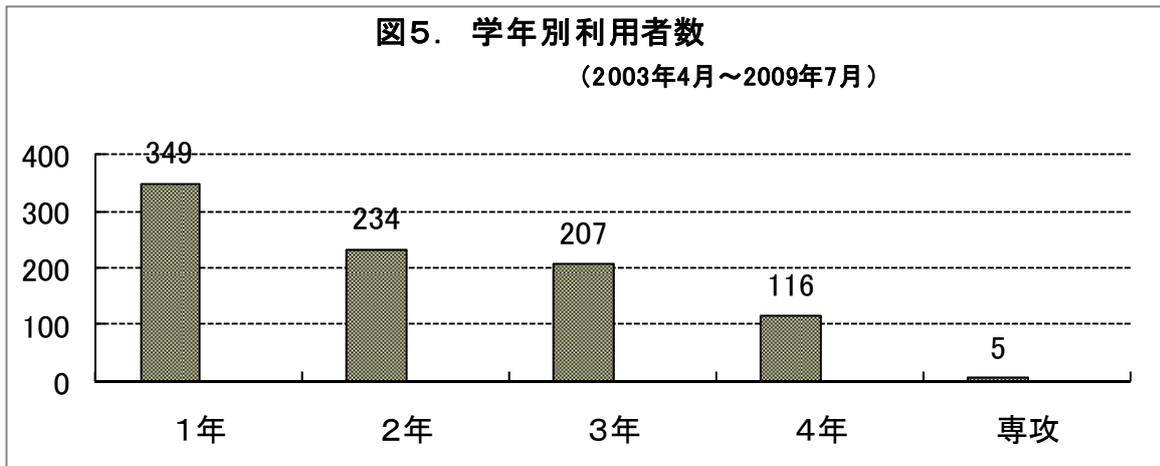
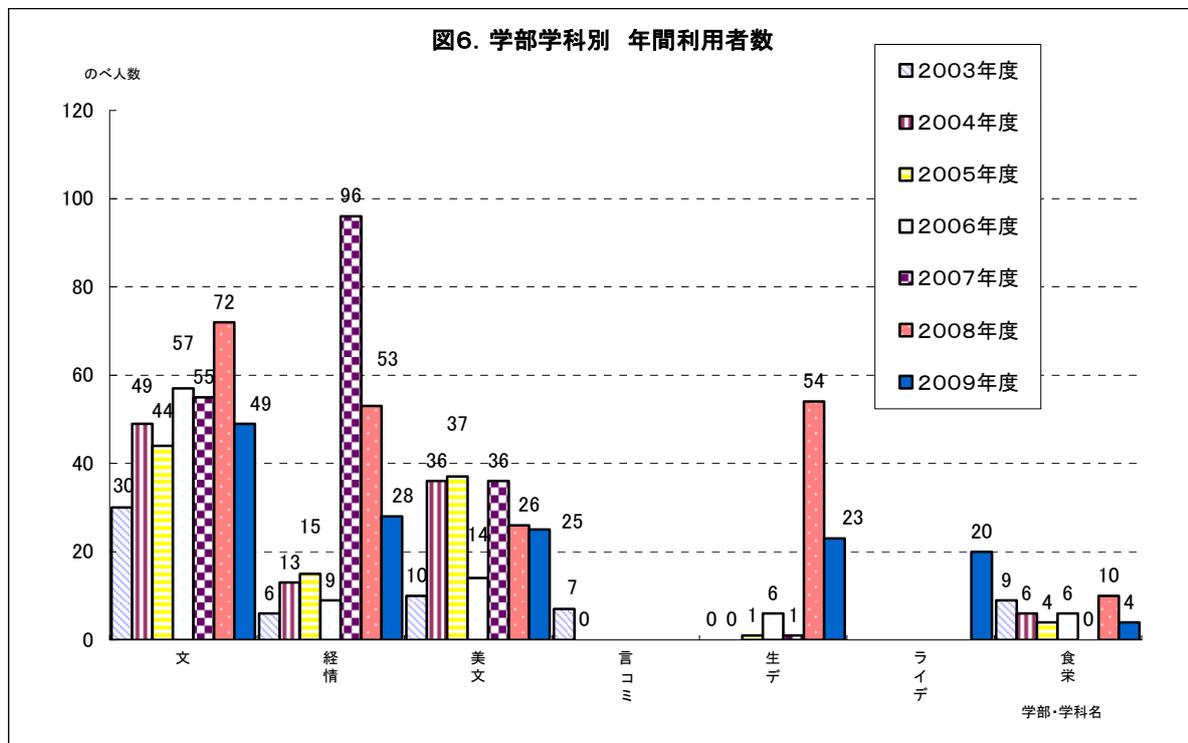


図5は学年別利用者のべ数のグラフである。1年生の利用が一番多い。図2でも述べたが、1年生は環境の変化や単位の組み立て、時間の使い方、新たな友人関係などに適応の困難がうかがわれる。学生たちは学年が進むにつれて学生生活に慣れ、学習への適応力をつけながら精神的に自立していく。また、対人面でも安定した関係を築くことができるようになり利用者数は減少するようである。

(6) 学部学科別利用者数

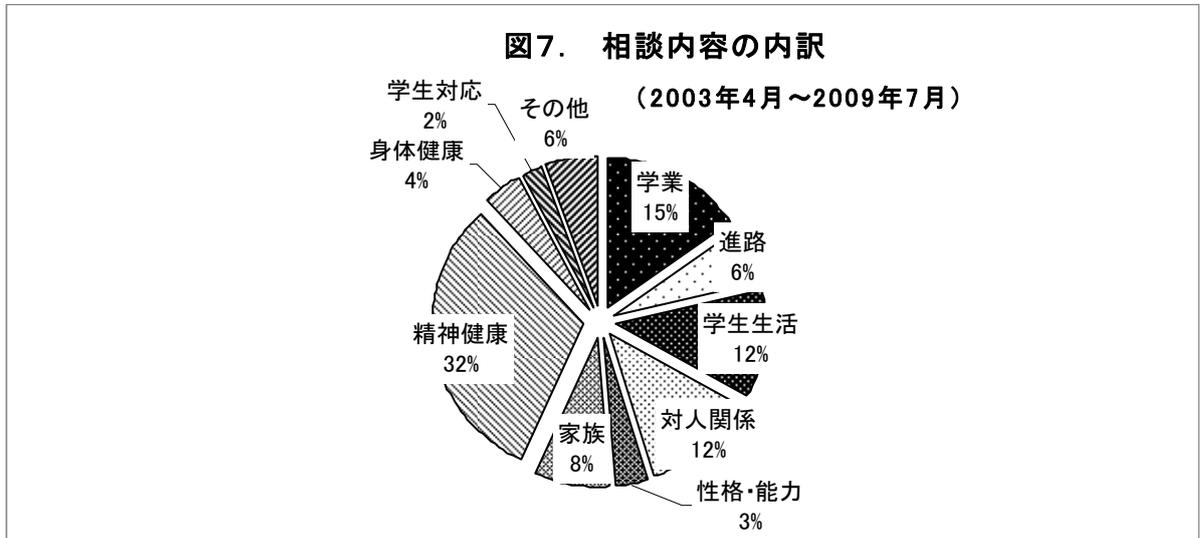


短大の利用状況を詳しく示した学部学科別利用者のべ数のグラフが図6である。先に図1のグラフで述べた変化は、2007年度の経営情報学部の利用者増加と、2008年度の文学部と短大・生活デザイン学科、ライフデザイン総合学科の利用者増加によるものである。図4のグラフで見た短

大の変化は、このグラフでより詳しい相談室利用状況を把握することができる。

3. 相談内容からみた学生の状況について

(1) 相談の内訳



相談内容の内訳を示した図7は学生がどのような訴えで相談を求めているかを表している。

(2) 内訳の内容

一番多かった「精神健康」は32%で気分や感情など精神的不調の相談である。いらだちや気分の落ち込みや無力感を訴えてくる。学生の心理的状況により定期的なカウンセリングを行ったり、精神疾患の疑いがあるケースでは必要に応じて医療機関を紹介している。

二番目に多かったのは「学業」の15%である。授業へのとまどいや理解度、学習方法、単位や資格取得、休学や復学に関する相談である。

三番目に多かったのは「対人関係」と「学生生活」でともに12%であった。「対人関係」はクラスメイトや異性関係、部活の人間関係などの悩みである。「学生生活」には生活習慣、アルバイト、下宿生活など日常的内容や話題があげられる。

以下、相談の頻度は低くなるが「家族」に関する相談は8%で、家族関係やその対応についての相談である。「進路」は6%で進学、就職、転学、将来の方針などに関する相談である。

「身体健康」は4%で身体症状や体不調に関する悩みや相談である。「性格・能力」は3%で学生自身の性格や能力に思い悩んでの相談である。

教職員の「学生対応」は2%で多くはないが、問題を抱えた学生への対応で来談されるケースである。学生へのカウンセリング依頼を受けたり、情報交換で学生への今後の対応について相談する。長期にわたり回復が困難なケースでは、学生に関連する複数の教職員との「事例検討」を行い、教職員と相談室スタッフが連携して学生支援ができるように対応している。

「その他」の6%はレポートや履歴書の作成、試験勉強、昼食に来室する学生である。学習については図書館の利用を勧めている。しかし、面談を重ねている学生の中には落ち着き集中できる場所として来室してくる。このケースの場合は相談室のドアをオープンにして、新たな面談者が来室した時には速やかに退室してもらっている。昼食で来室する学生が今年度は6月から1人いる。澤村先生や木村先生の説明にもあった昼食難民であるが、昼食を終えると礼を言い退室していく。

4. 具体的なサポート事例

- ① 短大生A子の事例 ②短大生B子の事例 ③短大生C子の事例

5. おわりに

相談しようとする学生はみな、相談することへの様々な抵抗と相談したい気持ちとの葛藤を乗り越えて来室してくる。その努力や決心をねぎらいつつ学生の話に傾聴する。ありのままを受容し共感することで学生を理解しながら話し合う。その過程の中で学生が何に困っているのかを明確化させ、それぞれの解決への援助を図る。これからも焦らずに見守る姿勢を維持しながら、学生への有効な心理的援助のあり方を探っていく努力を続けていきたい。

6. 「第6回FD研修会アンケート」にあった質問について

< 質 問 >

学生はどこかで自主判断をして自立しなければならない。カウンセリングとの関係をどのようにつけるのか。

< 回 答 >

学生の精神的な成熟度には個人差があるが、カウンセリングを進めていく中で悩みが軽減し、喜びや目標を見つけると学生は前向きに考え始めるようになる。そのような精神的变化を多く体験させることで学生は自らの力で自立していくようになる。

学生相談室の役割は、悩む学生の精神的な成熟を見守り、学業と学生生活の継続をサポートして無事卒業までを導くことにある。相談室に来る学生たちは何らかの問題を抱え、やり切れない気持ちを聴いて欲しくて来室する。相談室は、そのような学生の気持ちを受け留め（「受容」）、学生の気持ちに寄り添いながら（「共感」）、話に耳を傾け（「傾聴」）カウンセリングを行っている。

支援を必要とする学生への対応について

1. 大学生の「心とその問題」

(1) 大学生の問題の特徴

1) 発達・家族の問題

- ・現在の大学生には児童期の問題（不登校、家庭内暴力、いじめ、発達障害、神経症的習癖など）と成人期の問題（躁うつ病、統合失調症、強迫性障害、パニック障害など）が両方生じる。
- ・家族との関係が微妙なケースが多く、保護者とどうかかわるかが難しい。

2) 大学環境

- ・大学のスケジュールにより、4～5月や10月ごろの相談が多い。
- ・高校までより構造がゆるいので、やりやすくなる学生もいれば、履修を自分で組むなどに途方にくれる1年生もいる。
- ・学習上・学力上の問題をもつ学生が多く、その場合は精神的問題もおきやすい。

3) 対人関係・性格や人格

- ・友達を作らないといけないという強迫観念をもつことがあったり、他人の見ていない前で昼食を取れない学生もいる。
- ・強迫的な傾向の強い学生は問題がおきやすい。

4) 精神的な症状の特徴

- ・青年期の過程として生じやすい問題もあり、正常か異常かの区別が困難。
- ・病気の重症度と大学生生活の適応度は必ずしも一致しない。

(2) 学生の遭遇する危機

1) 人間関係：友達が作れないと孤立することがある。

不本意入学であったり曖昧な選択をした場合、無気力になり新しい友達作りを阻むことがある。

2) 勉学：新しい勉学の仕方に戸惑い、休みがちになったり、落伍する学生が出ることもある。

3) 一人暮らし：自立の訓練の不十分さからの生活の負担、限界を知らずに活動することでの過労など。

4) 夏休み明けに、入学時または入学後に発生した問題を持ち越すことがある。授業に出なくなることもあり、理由は様々で再受検希望や心の病気も。

5) 実習をはさんだ時期に問題が起こりやすい。実習の直前、終わるころ、終わってから自信をなくす学生が出てくる。統合失調症やうつ状態が誘発されることもある。

6) 「卒業恐怖」という言葉で一括される心の不健康状態もある。

2. サポートを必要とする学生とは

何をサポートするのかを考えて対応する。

(学業、卒業までの道筋、学生生活(人間関係)、就職など)

どの大学も大体10%くらいの学生が心理的問題を抱えていると考えられる。

(1) 発達障害—ちょっと変わった人たち

特別支援教育で取り上げられるようになった、中枢神経系の障害によると考えられる、生涯変わらない障害である。(小・中学校ではクラスの6.3%が発達障害の可能性があるとされている。)

1) 知的障害(精神遅滞)

・知能検査でのIQが70未満で、かつ適応の障害がある。

(IQ70~85は境界領域知能という。)

2) 広汎性発達障害=自閉症スペクトラム

自閉症と自閉症に類似の症状を持つ一連の人たち。

- ・コミュニケーションの障害
- ・社会性の障害
- ・想像性の欠如のため、特定の狭い領域への関心やパターンへの固執がある。

①自閉症(幼児期に言葉の遅れがある。)

②アスペルガー症候群(幼児期に言葉の遅れがあまりない)

- ・言葉を字義通りに受け取り、言葉の背景にある意味やニュアンスが理解できない。
- ・常識や規則が状況や立場によって変わることに、規則の背後にある意味を理解できない。
- ・創造性に乏しく特定のことにこだわりの強いなど。

記憶力は問題なく、教養科目はよくても、実験や実習などで主体性や想像性、他人との協調性、指導教員との1対1対応が必要になると成績が落ちる。

3) 特異性発達障害

①学習障害(LD)

他の能力に問題がないのに以下の能力だけが特異的に問題を持っている。

- ・「読み」「書き」「計算する」の1つあるいは複数に障害(医療の定義)
- ・「読み」「書き」「計算する」+「聞く」「話す」「推論する」の障害(教育の定義)
- ・さらに「社会性」の障害も含むという考えもある。(一部の専門家)

②注意欠陥多動性障害(ADHD)

注意集中困難、多動、衝動性の問題を持つ。

【不注意や注意力散漫】提出物の期限が守れない、約束の時間に来られない、スケジュールが組めない、ダブルブッキング、同時に二つのことができない、課題を最後まで集中して終わらせることができない、やたらとモノを失くす。

【多動・衝動性】気が短い、落ち着きがない、順番が守れない、待てない、突発的に口走ったり何かしてしまう、衝動買いなど。

4) 支援

- ・教員が無理にはっぱをかけたり、不真面目だと怒ったり、途方にくれやすい。
- ・具体的に、何を、どうやるかをなるべく明確に指示する。小学生に言うくらいの具体性で。
- ・視覚的方法をうまく使う。
- ・抽象的な指示や、曖昧な指示は伝わらない。
- ・できないことを改善させようとするよりも、現在の能力を生かす指導。

(2) その他の問題

1) ボーダーライン

パーソナリティの病理（性格の極端な偏り）

両極端な態度、適切な心理的距離のとれなさ、他人の立場に立てない、衝動性と自傷行為、見捨てられる不安、相手を操ろうとする傾向などがある。対人関係上の問題が多い。

ボーダーラインの学生への対応は、一人で抱え込もうとしないで他の人たちと協力するとよいです。

2) 不安障害

パニック障害、広場恐怖

社会不安障害（対人恐怖）・・・高校・大学に多い。

対応としては、医療機関やカウンセリングなどの勧め、本人の苦しみの理解を。

3) 強迫性障害

こだわりの強さ・・・無意味で不合理であると自覚しているにもかかわらず、ある考えが頭に浮かんだり、行動してしまうのが止められないこと。

完璧でないとダメと思い、レポートが期日までに提出できないなど。

4) 不登校と引きこもり

きっかけは様々で、進級など重要なことに失敗したり、あるいはレポートが提出できなかったり、知人とのちょっとしたトラブル、ちょっと強い口調で文句を言われた、大勢の雰囲気や圧倒されたなど。また、きっかけが思い当たらないこともある。

完全主義的で強迫的傾向が強いことが多い。対人関係が苦手な人が多い。

対応は、呼び出しや家庭とのつながりを保つ、学内での協力を。

5) うつとうつ病

気分や感情が落ち込んで意欲がうせ、いつもはできていたことができなくなる。死にたい

気持ちが自殺につながることも。

狭義のうつ病（特別な原因が見当たらない）と、何かの出来事がある場合がある。うつへの対処としては大原則は休むことである。薬物も効く。

うつの学生への対応は、ゆっくりと話す、なるべく教員の話す時間を減らして学生の話しを聞く。頭ごなしに否定したり、こちらの意見を押し付けない。最低限必要な課題や指示は出しても、調子が悪くてできなかった場合に、責めたり怒ったりしない。

6) 自殺

理由は様々で、予測は難しい。

友達がいらない、家族との交流が少ない、まじめで自分に自信が持てない人、ストレスやトラブル解消が下手などがよくある。

周りが気づくことが大事

自殺の危険性のある学生への対応は、まず苦悩を受け止める、説教ではなく、辛さを理解。専門家へつなぐ。

7) 心の病気－統合失調症

知覚や思考に問題が生じ、幻聴、妄想、それらによる問題行動。立たない症状（陰性症状）としては、集中できない、意欲がわからない、人とかかわるのが難しい等がある。

大学に来なくなる、学部やサークルでトラブル、アパートでのトラブル、自殺などの行動として現われたりする。

対応は、医療機関へつなぐことが大切。最近は薬が聞いて外来治療の人も多いので、外来治療と学業の両立のための援助を考える。

学生には、無用な叱責をしない、話し相手になる、適度の具体的支援など。

3. 大学の中での学生の心理的援助の資源（一般的に）

保健室（保健管理センターの看護師や保健師）

身体的な症状に絡めての相談が多い。

学生にとってはカウンセラーよりも話しやすい。

心理相談室

心理的な問題や悩みについて、心理学を下地にした専門的な援助をする。

学生相談室

心理学の専門家や、教職員の中から経験者などが相談に乗り援助する。

ピア相談

学生が学生の相談に乗る。

なんでも相談窓口

専門の職員（大学職員）が学生の訴えを聞き、適切な人や機関につなぐ。

教育の中で

教員が、授業や空き時間などに学生の相談に乗る。

4. 支援の心構え

(1) 一般の教員がやれること

- ・学生が持ちやすい心理的問題についての知識をもつ。
- ・学生の様子を観察し、問題を持った学生を早期に察知する。
- ・話を聴く。(聞き上手な聴き方)
- ・適切な対応を取る。その中には適切な人や機関につなぐことも含む。
- ・教育場面・教育問題は教員の専門分野なので専門家として対応する(勉強の仕方など)。その場合も上手に話を聴いて問題の核心をつかんでからのほうが効果的である

(2) 聴き方

たいていの人は聞くより話す方が好き・聞いてもらうことが好き。教員も、自分の意見を学生に聞かせるほうに話しを向けがち。

聞き上手とは、相手が話しやすいように受け答えをして、巧みにその人の話を聞くこと・聞く人であり、聞くとは相手の気持ちを理解することである。

↓

聞き上手になるには、自分の意見を話したくないような練習が必要

相手を理解して、相手にもそれが伝わると、信頼関係が生まれる。

なんでも本音を話せると人はとても楽になり、安心して自分で考えられる。自分の問題を自分で解決することもある。

聞き上手のヒント

話し手が主役

相手が言いたいことを邪魔しない・引き出す

自分の意見は後回し

相手の気持ちを(相手の立場で)理解する

相手の本当に伝えたいことを(相手の立場で)理解する

対等の関係

助言はあまり効果なしと考えておく

秘密を守る(第三者に話すときは本人の了解をとる)

何ができるかを考えつつ話をきく

表向きの相談理由と真の相談理由の違いがあることもある(様子見)

まず「聞いて」、その上で必要に応じて「調べて」、「動く(連絡・調整など)」

(3) 対話のコツ

- ・「ええ」「うん」「そうなの」「なるほど」と適度にうなずきながら、柔らかい、しかし真剣な態度・表情で。
- ・相手の言葉をまとめる・・・すぐにコメントが返せなくても、相手の表現をある程度用いつつ「そうか、これこれで、こういうことだったんだね」など。

- ・早分かりにならない・・・つい「わかるよ」「大変だったね」と早い段階から言いたくなることもありますが、あまり軽い感じで言い過ぎると却って“本当にわかっているんだろうか”と距離をおくことも。
- ・解釈に走り過ぎない・自分の考えを押し付けない・・・学生の話しをある程度聞いていくと問題の核心が見えてきてつい自分の意見を言ったり、解釈を加えたりしたくなりますが、あまりやりすぎると逆効果。
- ・相手に迎合しない。
- ・時間を限る・無理をしない。

(4) 助言・アドバイスのコツ

- ・ゆっくりと、きつくないように伝えるとよい。
命令や脅しではなく提案として、それを受けるかどうかは学生に任せる気持ちのゆとりをもっていただいたほうが効果があるよう。
- ・カリキュラム・事務手続き上の事実・現実はきちんと伝える。
個人的な見解や感情の表出ももちろん有効ですが、受け止める素地が学生にあるかを判断して行うほうが効果的。
- ・アドバイスを学生がどう受け取ったかを確認できるように。
情報提供の場合には、聞き逃したり誤解していることもあります。アドバイスや助言にはすでにやってみたけれどできなかつたり、何らかの理由でとてもできそうにないと思っていることもあります。
一般的過ぎて、具体的にどうしたらいいかわからないでいる場合もあります。学生が実行できるようになるべく具体的なアドバイスを、学生が実際にやれるかどうかを二人で確認しながら行えるとより効果的です。

5. これからのサポートのあり方

(1) 連携を大切にーネットワーク作り

困ったときは自分ひとりで抱え込まずに、信頼できる人（かつ守秘義務を理解している人）やカウンセラーに相談するなどして互いに連絡を取り合いながら学生を支援していく必要がある。そのための道筋を作っておくことが望ましい。

(2) 連携

基本は「本人に了解をとった上で行う」ということ。情報のやりとりは必要最小限の範囲に留めるようにすることを関係者間で認識しておく。

連携する際も守秘義務を踏まえ、茶飲み話や世間話のレベルで第三者に話してはならない。

(3) 守秘義務

学生からプライベートな話を聞いたときは、その内容を第三者に伝えることはせず秘密を守る。秘密を守ることが相手との信頼関係を築く基本である。教職員ひとりひとりに守秘義務は課せられているという認識を持つ必要がある。

(4) 学内でのネットワーク作り

他の教員(学科、学部)・保健室・相談室・事務部・就職支援室など
問題によって、最も適切な資源との連携を取る

(5) 学外とのネットワーク

病院・相談室・支援施設や各種相談所など
保護者

V. 第6回FD研修会 質疑・応答



第6回FD研修会 質疑応答

河内先生→澤村先生

質問：「インターカー」とは何ですか？

回答：初回面接を担当する人のことですが、保健室の場合は相談室の窓口の人でしたり、相談室のいわば受付を担っている人のことをインターカーということもあります。

二階堂先生→澤村先生

質問：保健室を訪れる学生数は増加傾向にあるようですが、それを減らせないまでも抑制するには教職員は何をすべきか御示唆ください。

回答：利用者が減れば単に良くなるというわけでもありませんので、どう答えていいかわかりませんが、日頃見ているとインターネットを使っての相談など、そういうところに糸口があるかもしれません。また学生も特定の人ではなく、色々な人が来ます。その人たちがいられる色々な場所があればいいと思います。それと保健室を訪れる学生の中には、顔を知っている学生との接触は駄目でも、知らない学生がいる場所はOKという人もいますので、保健室だけではなく、図書館などを勧めることもあります。他にも小じんまりとした、すっと入れるところ、例えば、先生方の部屋が空いていると入りやすかったし、保健室で知っていることをクラスアドバイザーに伝えることもあります。個人情報を伝えることを本人がOKならいいですけど、生活上のトラブルにつながりそうな時は違うような時期もあります。むしろ、先生方に聞かれたときには答え易いです。情報の糸口を開けたりすれば良いと思います。

河内先生→石村先生

質問：図4より、高校生の利用が近年(2006年以降)減少しているのは何か理由があるのでしょうか？

回答：私が高校を退職したのが大きな要因ではないかと思います。私自身と高校とのかかわりが無くなったことでそうなったと考えています。

岡島先生→木村先生

質問：なんでも相談の利用状況は、大学の実人数ではどのくらいなのでしょう？増えているのでしょうか？

回答：2003年 のべ48名(実人数9名) 2004年 のべ41名(実人数3名)
2005年 のべ39名(実人数5名) 2006年 のべ46名(実人数9名)
2007年 のべ40名(実人数1名) 2008年 のべ36名(実人数7名)
2009年 のべ33名(実人数6名)*4月から7月まで

高瀬先生→木村先生

質問：図7、相談内容の内訳で「学生対応 2%について」教職員からの相談であるとの報告でし

たが、数字は学生に限っているのでしょうか？全人数の中に教職員も入っているのですか？

回答：のべ利用者数は教職員数も含めて入っています。相談内容は学生に限ってのことですが、私には経験がありませんけど教職員の相談を受けている人もいます。

岡島先生→木村先生

質問：対応はあくまで個人的にし、その対処データを共有するシステムはあるのですか？

回答：月末に一月の統計を取り、室長の西川先生に報告、合わせて諸江部長にも日時、学部、学科、学年、内容をまとめて報告しています。私自身が先生方とコミュニケーションを取ればと感じますが、そういう場合は澤村先生に相談をしたり西川先生に報告し、具体的に連絡を取ってもらったりしています。

山岸先生→木村先生

質問：実習作品に関わることですが、私は色彩演習の授業を持っていて約70名の学生に課題を提出させています。提出された課題は、全ての学生が見えるように貼って、君は70点、60点といひ、全部に点数を入れてなおかつ返しています。そのようにして後期もするつもりですが、「私はどうして80点だと思っていたのに70点なのか」と質問に来る、また別の学生は「私の作品はできが悪いのを知っている。毎回点数を貼り出されると深刻となる」と言います。公開し目前で点数を付けていくことの良否はどうでしょうか？他の美術大学やスポーツでも非常にデリケートですが、私が決めると自信を喪失したり、先生との関係が危機に瀕することがあります。

回答：難しい問題で、公表することに異を唱えるのに対しては、先生の採点基準をおっしゃればいいですし、いつもいつも悪い点で晒しものになるのは、芸術系の科目でどのくらい行われているのか、学生がどのくらい了承されているのかはわかりませんが傷つくかもしれません。長所、短所はありますけどアドバイス向きなわけですよ？

質問：悪平等の話があります。課題をみんなで見て高まっていく期待感と、そうでないときのがんばれっていう支援とありまして、他の先生も接している場合があるので、はっきり言うてくる学生には言うんですけど、あんまり酷いものについてはちょっとかわいそうで公開しませんでした。そうすると学生には「悪いから出さなかった」って言うのが伝わってくる。そういうわけでのアドバイスです。

回答：聞いていた先生の中での良いアドバイスはないですか？いろいろ考えられるのでどっちが良いか言えません。

質問：試験の点は見られませんが、作品の評価は公開しないわけにはいきません。先々良くないです。どういうスタンスで評価しているかわからないってことが必ず出てきます。また考えていきたいと思います。

回答：最近は普通の授業でも評価を聞きに来る学生がいます。落としたらクレームっていうかどうして不合格なのか聞けるシステムがあると聞いています。投書箱があって事務から来て連絡があるというのも技だと思います。確かに疑問には答えるってのはありました。しかし全員に公開するのは難しいです。

平木先生→木村先生

質問：精神的症状で正常と異常がありますが、私は良識と礼節教育をしていますけど通じません。学校・家庭・社会の環境がそうさせるのか伝わりません。本人の解釈が通じないのか、先日もイヤホン付けて話を聞いている学生がいたのですが、注意したら「聞こえている」と「なんですか？」と、なんて失礼なのかという問い合わせでした。現代っ子は正常と異常、本人の持っている内面的な教養や姿が見えません。病んでいる子も多いですけど、あんまり甘い教育が甘くなり、私たちのストレスが溜まってしまふことが日々あります。繰り返させることに飽きっぽい、粘りと根性がない、それは病気なのか？根性とは何なのかって話になります。また、日々身勝手、横着な部分が、精神的な面の弱さと区別のつかない時があります。正常と異常の判断、異常なら正さなければならぬが、そのところがわかりません。実際8月のフレッシュマンセミナーで禅寺に行ったところ、場の空気が読めないのではなく、ちゃんとしていました。雰囲気を感じ、寺の静けさを感じ、寺の僧にはきちっとしていました。そこで20-30分の座禅は平気で静かに組んでいました。その意味では演技の部分と甘えの部分があるように思えます。

回答：正常と異常は曖昧で山ほどの議論があります。じゃあ病気でなければ正常なのかって話になりますし、統計で多数が正常でそうでないのが異常か、平均なのが正常でそうでないのが異常か、社会に乗れるのが正常でそうでないのが異常か、他にもありますしどれか一つに決められません。時代による正常・異常の違いもあります。昔は敵に向かっていったのが正常で、反戦を唱えたのが異常でした。「なぜですか？」に対する戸惑いは、教育に関わる者なら誰でもあります。つい「昔の学生は」と言ってしまうのですが、それは良くないことです。澤村先生も話していましたが、一杯ある特徴の、まだまだ未成熟な部分を育てるといふ教育をしなければと思います。個人的に思うことはありますが、時代もあり、その時代の学生もあります。その部分を育てていくのが大切で、「なんですか？」にきちっと答えるのも要求されており、そういうのが今の大学教育に要求されているのだと思います。

閉会の辞

総括

FD委員長 岡島 厚

第6回FD研修会には、石田学長を始め教職員のほぼ全員の教職員の方々が出席され、3時間にわたって熱心に研修し議論した。

まず、FD委員長から平成20年度FD活動の取組みについての報告があった。平成18年から本格的に始動始めた本学のFD活動は、「GPA(Grade Point Average)システムの構築」や「初年次教育の充実を図る仕組みの策定」などのかなり時間をかけて取組むべき施策をのぞいて、概ね日常の教育活動として軌道にのって活動し機能していると考えられる。そのうち「アドミッション・ポリシー（求める学生像）」については、平成18年度、各学科・コースにおいて検討していただき、平成19年5月の教授会で承認されホームページや入学案内などで公表している。また、「アドミッション・ポリシーに沿ったカリキュラム体系の改善」は、改組などを通じて十分配慮されてきたことである。しかし昨今、多くの大学では、文科省の指導もあってアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）という三つのポリシーを一つのセットとして取り扱い、例えばアドミッション・ポリシーは「入学者選抜に関する要項」の入学者受入方針として記載している。本学でも、さらにわかり易い形で公開するように改善する必要がある。

今回の研修会のテーマは、國田FD委員から提案された「学生サポートにおける心理学的援助について」であり、講師の木村敦子准教授がご指摘されたように、「今、全国どこの大学でも大体10%くらいの学生が心理的問題を抱えており」、また日頃、教職員が学生に接しているとき、「メンタルヘルスの面から如何に上手く学生をサポートすれば良いのか」は、多くの教職員が抱えている課題でもある。

そこで、本研修会では、保健室・澤村 明美さん、なんでも相談室・石村順子さん、そして基礎教育機構・木村敦子准教授にご出席を願って、本学における最近の保健室やなんでも相談室における学生の行動や様子などをお聞きして、学生サポートにおける心理学的援助について、教職員が注意すべきこと、考えなければならないことなどをご教示いただいた。

まず澤村 明美さんから「保健室からみた学生の現状と対処について」と題して、1. 最近の保健室での出来事、2. 短大生の保健室利用状況、3. 保健室で関った心理的問題に関連すると思われるもの、4. 学生とのかかわりから感じること、5. 過換気（過呼吸）発作とその対処などについて、本学における最近の保健室における学生の行動や様子をお話いただいた。さらに、過呼吸発作のこと、自傷行為や摂食障害、不登校や無気力の学生のことなど深刻な問題についても述べられた。そして、学生との対応において保健室のインターカーとしての役割は重要であり、しかる後クラス担任、相談室、全教職員が連携して学生をサポートするという共通認識が大切と述べられた。

次に、石村順子さんからは、「なんでも相談室からみた学生の状況について」、開設当初から今日に至るまでの利用状況と学生支援の様子を、なんでも相談室の利用者数を提示しながらお話いただいた。特に、短大の利用者延べ人数が2008年度64人、2009年度(7月まで)47人と増加していることは、特に気掛りなことである。そして「相談しようとする学生はみな、相談することへの様々な抵抗と相談したい気持ちとの葛藤を乗り越えて来室している。その努力や決心をねぎらいつつ学生の話に耳を傾けている」と話されたが、今後ともよろしくご指導のほどお願いしたい。

最後に、基礎教育機構・木村敦子准教授から「支援を必要とする学生への対応について」臨床心理学的立場から「大学生の心とその問題」、「サポートを必要とする学生とは」、「支援の心構え」「サポートのあり方」について順序だててご教示いただいた。教職員が学生サポートする際の心構え、聞き上手のヒントや対話のコツ、助言・アドバイスのコツ等を具体的に話され、非常に参考になった。そして、これからのサポートのあり方として教職員の「守秘義務」を踏まえた「連携プレー」が重要であり、またそこに「難しさ」があること、さらにサポートのための学内・外とのネットワーク作りも重要であり、急務の課題である。一方では、メンタル的に健康でたくましい学生を育む教育とはどのような教育であるか、「サポートを必要とする学生」を少なくする手立てはないのか、今後とも継続的に真剣に考える必要がある。

資料 1

平成 21 年度前期 「授業改善のための学生アンケート集計結果」

平成21年度前期 授業改善のための学生アンケート集計結果

1. 学生アンケート実施

実施日：平成21年7月10日(金)～7月27日(月)

科目数：92科目

回答数：3161枚

2. アンケート集計処理

短期大学全体 → 92科目 (3161枚)

ライフデザイン総合学科 → 55科目 (1505枚) <参考>

食物栄養学科 → 43科目 (1892枚) 両学科共通は6科目 (236枚)

1年生科目 → 45科目 (2119枚)

2年生科目 → 47科目 (1042枚)

(ライフデザイン総合学科には生活デザイン学科も含む)

3. 短期大学全体のアンケート集計結果

(1) 評価が良い回答

問1. 先生の声は聞こえましたか。

問4. 教科書・参考書・配付資料などは活用されましたか。

問8. 授業に対する先生の熱意が感じられましたか。

(2) 評価が悪い回答

問12. あなたは授業の「講義要項(シラバス)」を活用しましたか。

問13. あなたは、この授業の勉強(予習・復習・課題など)をしましたか。

(3) 授業について当てはまる項目で回答数が多い項目

(%は受講学生数に対する回答した学生の割合)

4. 量が多かった。 (21.5%)

5. 内容が難しかった。 (26.1%)

7. 自分の基礎知識がなかった。 (23.6%)

8. 自分が勉強不足だった。 (19.2%)

4. 短期大学全体と両学科の比較、1・2年生科目の比較

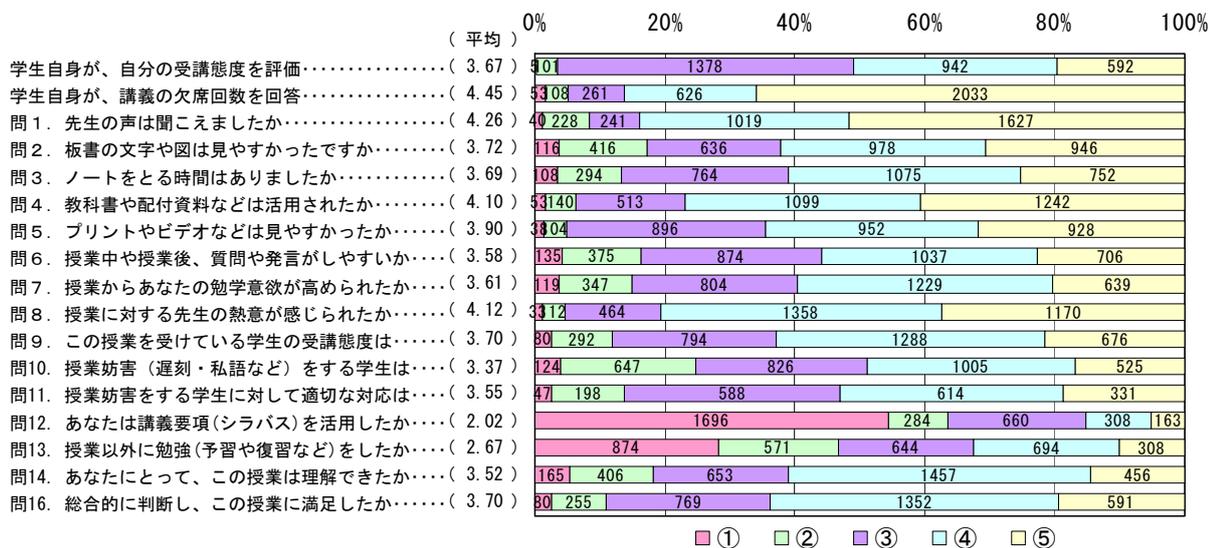
(1) 短期大学全体と両学科の傾向はほぼ同じである。

(2) 1年生科目と2年生科目の比較では、1年生の方が「量が多かった」「内容が難しかった」「自分の基礎知識がなかった」「自分が勉強不足だった」と答えた学生が多い。これは昨年度までと少し異なる傾向である。

(松井良雄)

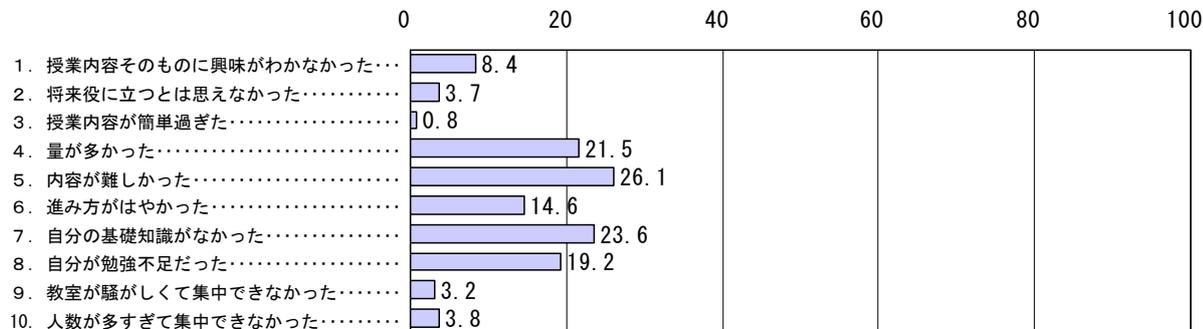
短期大学の全科目

アンケート集計結果（数値は票数）



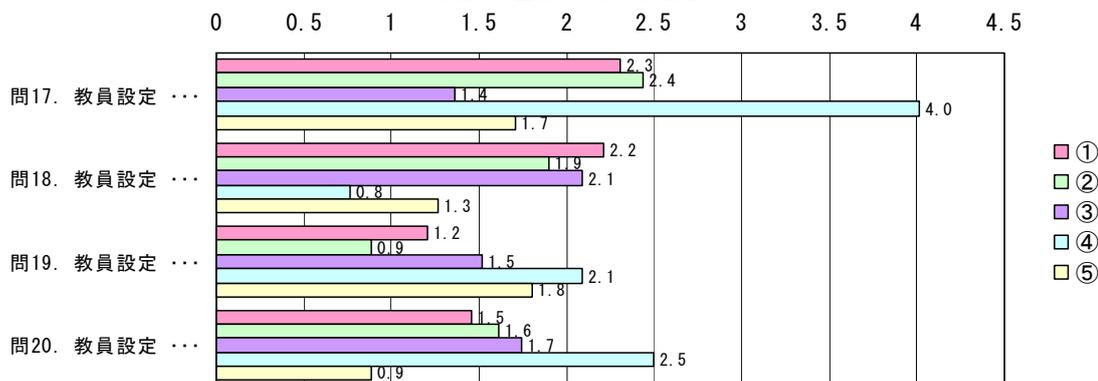
問15. この授業について、当てはまる項目（複数回答可）

受講学生数に対する割合（%）



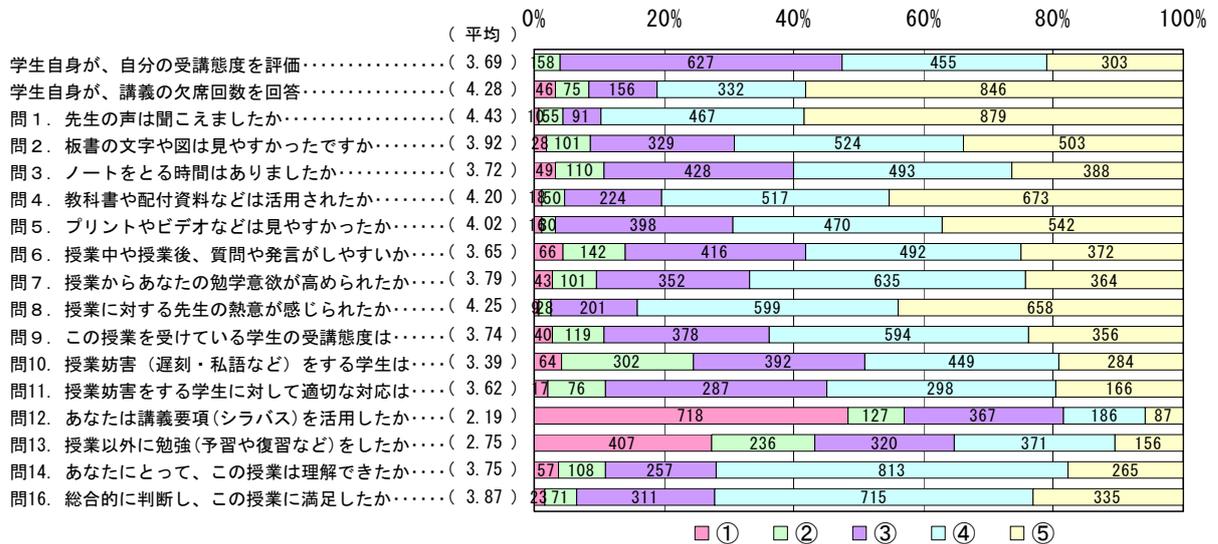
担当教員 自由設定設問

受講学生数に対する割合（%）

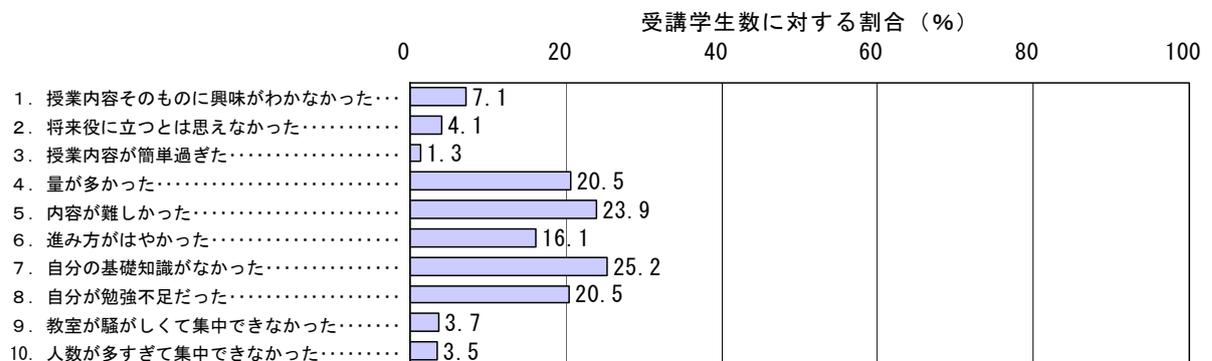


生活デザイン学科・ライフデザイン総合学科

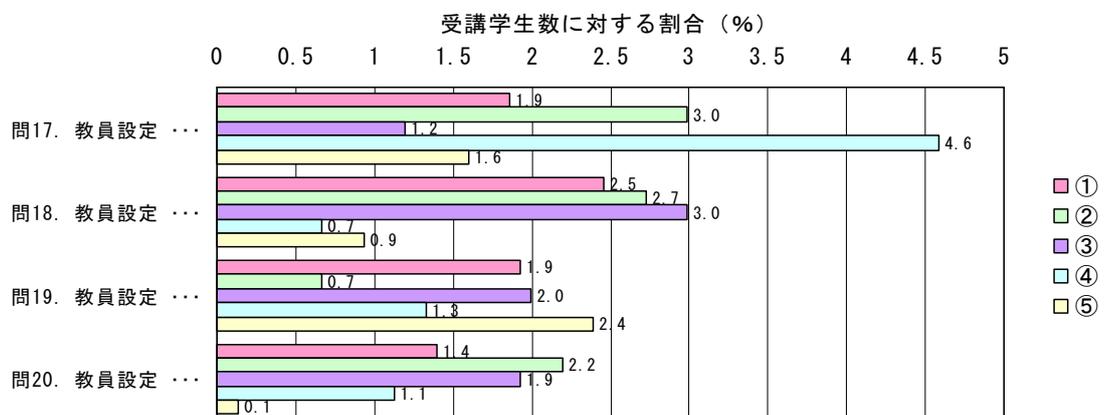
アンケート集計結果（数値は票数）



問15. この授業について、当てはまる項目（複数回答可）

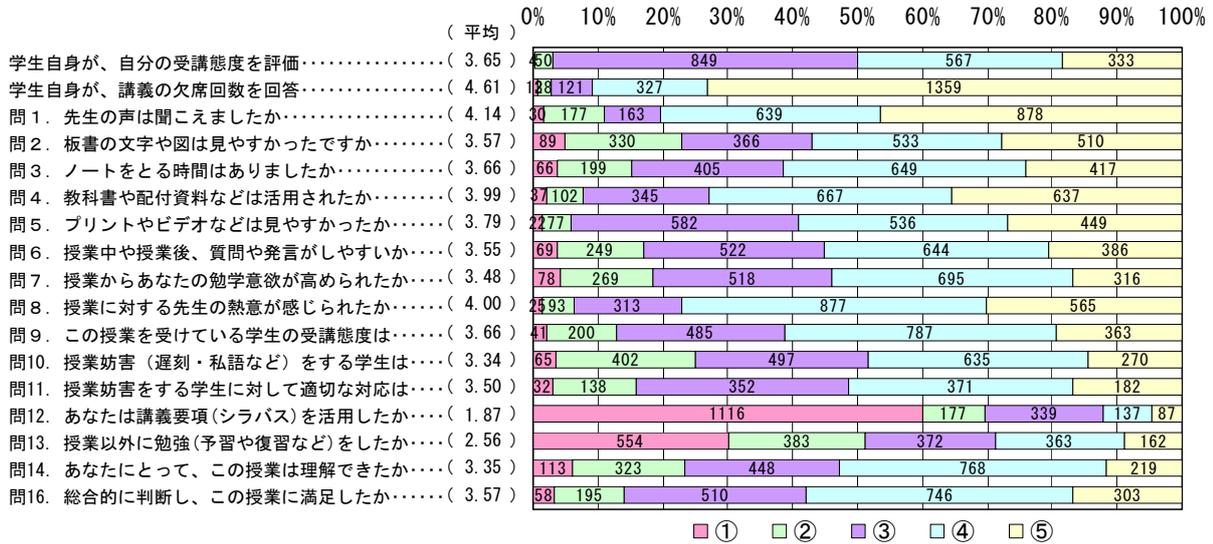


担当教員 自由設定設問

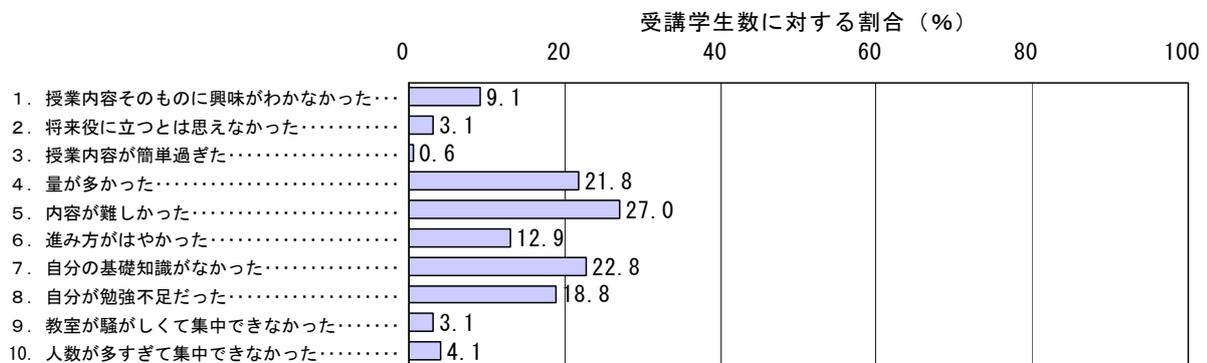


食物栄養学科

アンケート集計結果 (数値は票数)

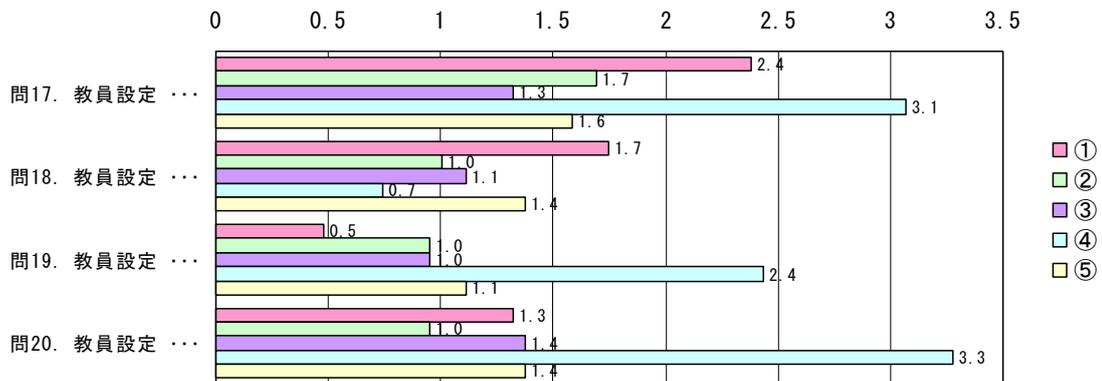


問15. この授業について、当てはまる項目 (複数回答可)



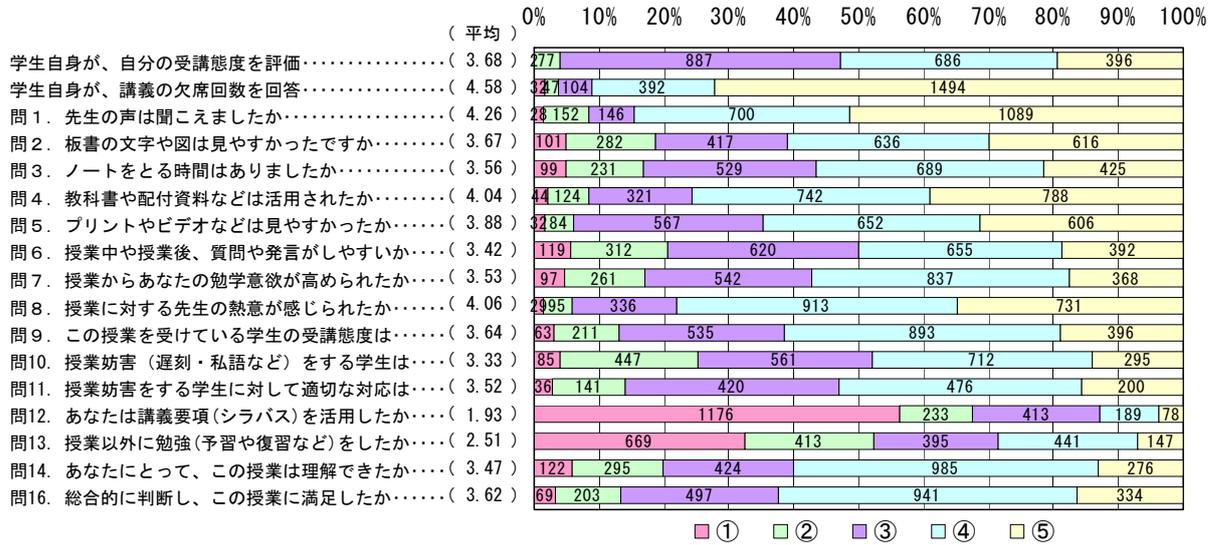
担当教員 自由設定設問

受講学生数に対する割合 (%)

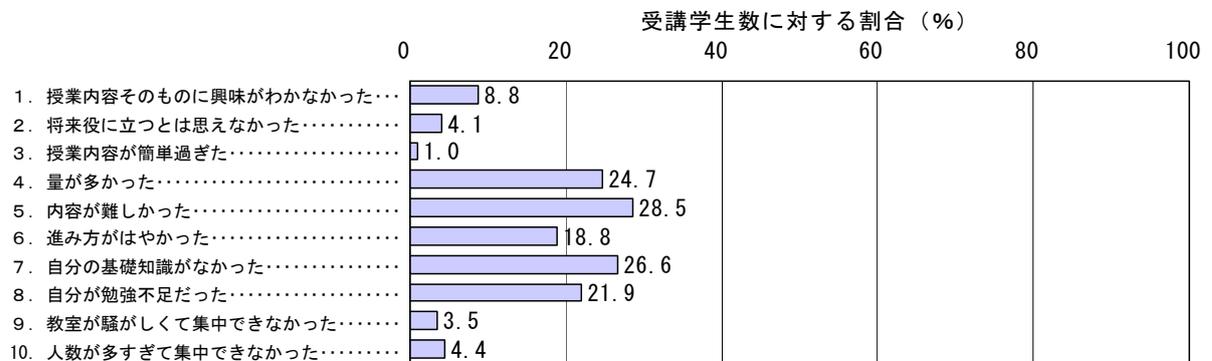


1年生科目

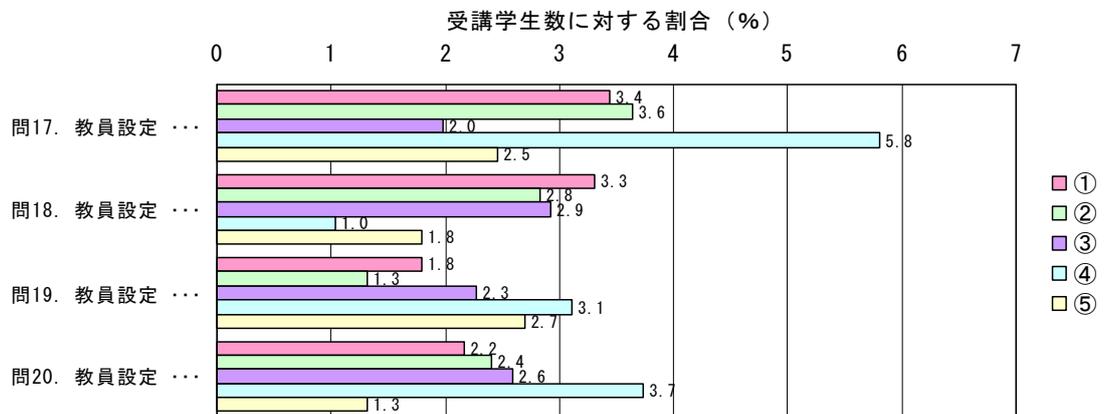
アンケート集計結果 (数値は票数)



問15. この授業について、当てはまる項目 (複数回答可)

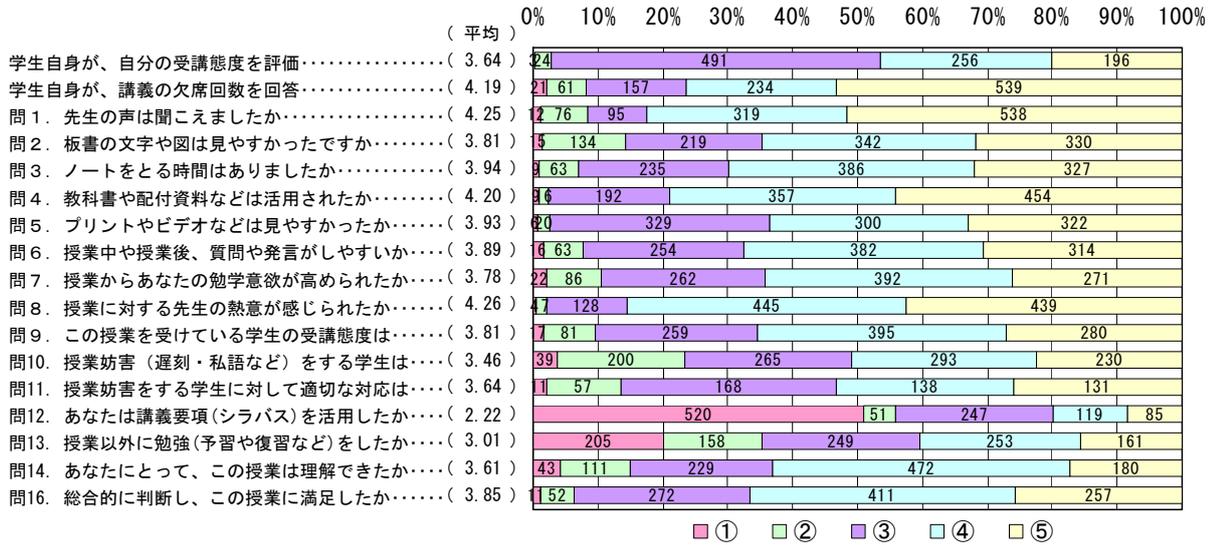


担当教員 自由設定設問

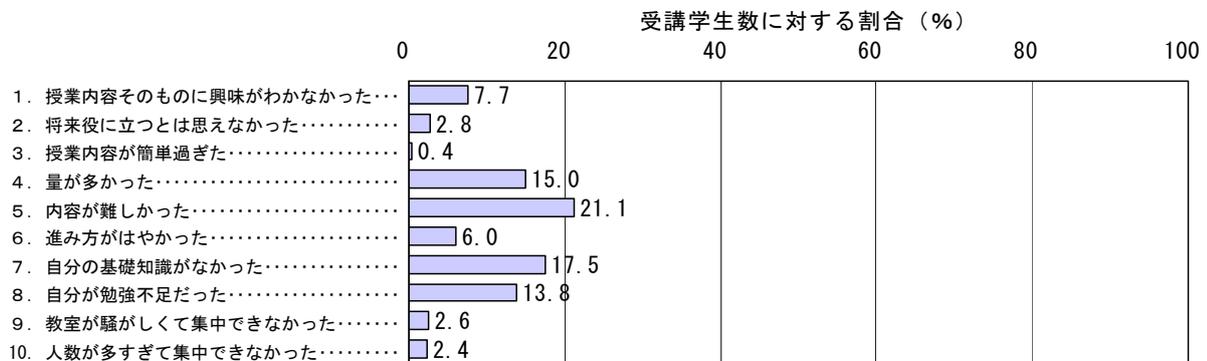


2年生科目

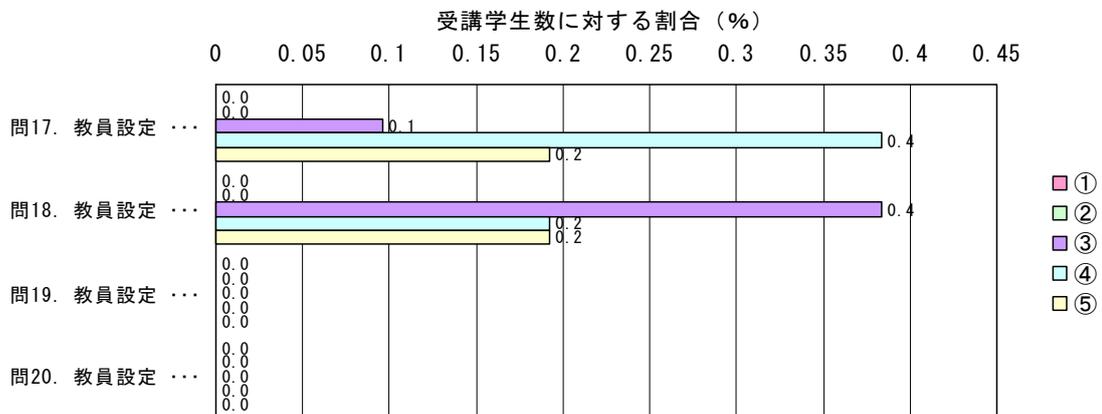
アンケート集計結果 (数値は票数)



問15. この授業について、当てはまる項目 (複数回答可)



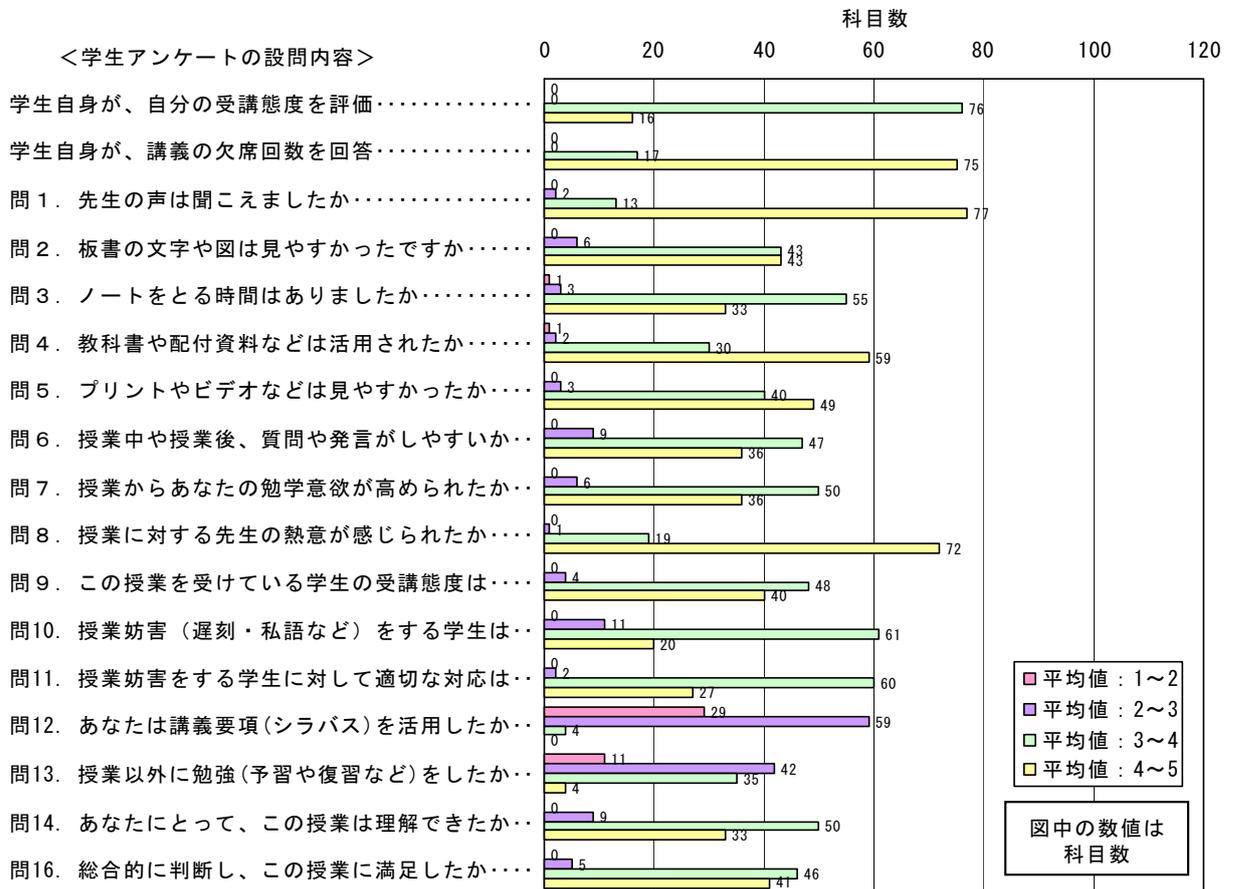
担当教員 自由設定設問



金沢学院短期大学 平成21年度前期 授業改善のための学生アンケート

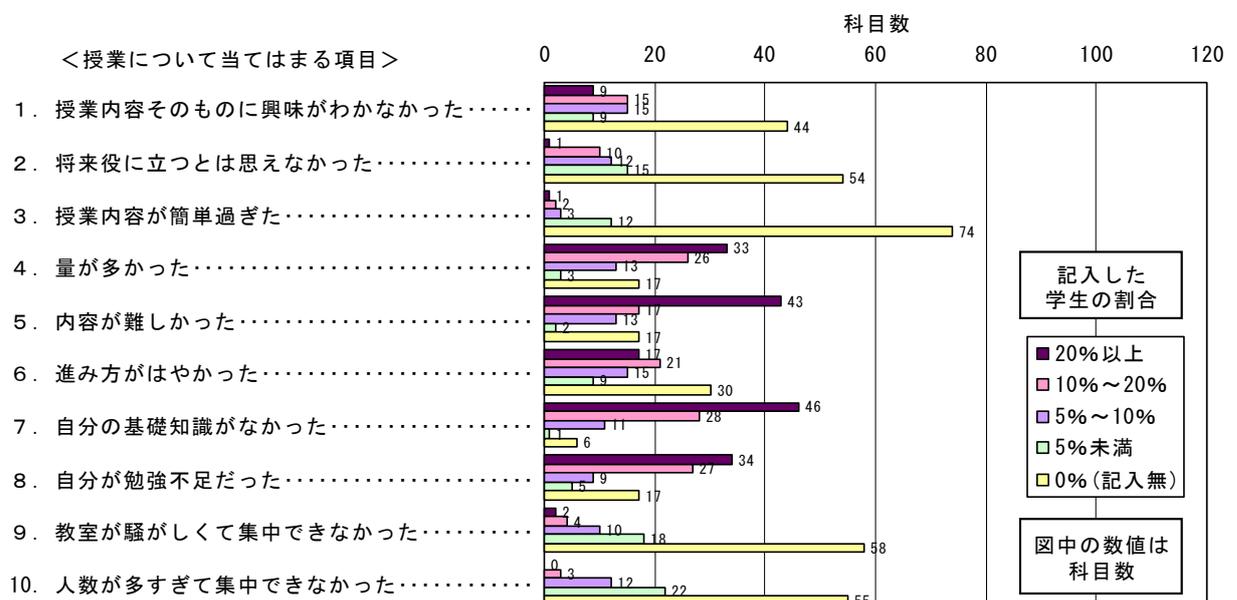
科目数の分布結果：短期大学の全科目数=92科目

「設問（問1～問16）」ごとの「平均値（1～5）」に対する科目数の分布



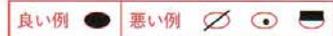
「授業について当てはまる項目」ごとの「記入した学生の割合」に対する科目数の分布

参考：「記入した学生の割合」は、受講学生数に対する記入した学生の割合（%）



授業改善のための学生アンケート

マークはHB程度の鉛筆で○内を塗りつぶしてください。



このアンケートは学生の皆さんが受講した授業科目を今後より一層充実させるため、実施するものです。成績評価とは全く関係ありません。率直かつ真剣にお答えください。

授業科目	教員氏名	科目番号 (たてに)	
		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

I. あなたについて、お尋ねします。当てはまる箇所をマークしてください。

学 科	生活デザイン学科	ライフデザイン総合学科	食物栄養学科				
	○	○	○				
学 年	1年	受講態度	非常に悪い	やや悪い	普通	まあまあよい	非常によい
	○		①	②	③	④	⑤
	2年	欠席回数	4回以上	3回	2回	1回	0回
	○		①	②	③	④	⑤
	その他						
	○						

II. 授業について、お尋ねします。以下の各項目についてあなたはどのように思ったり、感じたりしましたか。各項目について当てはまる番号を1つ選び、マークしてください。

1	先生の声は聞こえましたか。	ほとんど聞こえなかった ①	あまり聞こえなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ聞こえた ④	よく聞こえた ⑤
2	板書の文字・図は見やすかったですか。	見にくい ①	少し見にくい ②	どちらともいえない ③	まあまあ見やすい ④	見やすい ⑤
3	ノートをとる時間はありましたか。	ほとんどない ①	あまりない ②	どちらともいえない ③	まあまああった ④	十分にあった ⑤
4	教科書・参考書・配付資料などは活用されましたか。	ほとんど活用されていません ①	あまり活用されていません ②	どちらともいえない ③	まあまあ活用されている ④	十分に活用されている ⑤
5	プリント・ビデオ教材・プロジェクター画面などは見やすかったですか。	見にくい ①	少し見にくい ②	どちらともいえない ③	まあまあ見やすい ④	見やすい ⑤
6	授業中や授業後、質問や発言がしやすかったですか。	思わない ①	あまり思わない ②	どちらともいえない ③	まあまあそう思う ④	そう思う ⑤
7	この授業から、あなたの勉学意欲を高められましたか。	高められなかった ①	あまり高められなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ高められた ④	高められた ⑤
8	授業に対する先生の熱意が感じられましたか。	感じられなかった ①	あまり感じられなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ感じられた ④	感じられた ⑤
9	この授業を受けている学生の受講態度はあなたから見てどうでしたか。	良くなかった ①	あまり良くなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ良かった ④	良かった ⑤
10	授業妨害（遅刻・私語・携帯操作・居眠りなど、授業以外のこと）をする学生はいましたか。	たくさんいた ①	少しいた ②	どちらともいえない ③	ほとんどいなかった ④	いなかった ⑤
11	10で①または②の場合、授業妨害をする学生に対して適切な対応はなされていましたか。	適切な対応はされなかった ①	あまり適切に対応されなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ適切に対応されていた ④	適切に対応されていた ⑤
12	あなたは授業の「講義要項（シラバス）」を活用しましたか。	ほとんど活用しなかった ①	少し活用した ②	どちらともいえない ③	まあまあ活用した ④	大変よく活用した ⑤
13	あなたは、授業中以外の時間（休憩時間や帰宅後）に、この授業の勉強（予習・復習・課題など）をしましたか。	ほとんど勉強しなかった ①	あまり勉強しなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ勉強した ④	勉強した ⑤
14	あなたにとって、この授業は理解できましたか。	ほとんど理解できなかった ①	少ししか理解できなかった ②	どちらともいえない ③	まあまあ理解できた ④	大変よく理解できた ⑤
15	この授業について、次の項目のうち当てはまる番号をマークして下さい。（複数回答可）	① 授業内容そのものに興味がなかった。 ② 将来役に立つとは思えなかったので、興味がなかった。 ③ 授業内容が簡単過ぎた。 ④ 量が多かった。 ⑤ 内容が難しかった。 ⑥ 進み方がはやかった。 ⑦ 自分の基礎知識がなかった。 ⑧ 自分が勉強不足だった。 ⑨ 教室が騒がしくて集中できなかった。 ⑩ 人数が多すぎて集中できなかった。				
16	総合的に判断してあなたはこの授業に満足していますか。	かなり不満足である ①	少し不満足である ②	どちらともいえない ③	まあまあ満足している ④	大変満足している ⑤
17		①	②	③	④	⑤
18		①	②	③	④	⑤
19		①	②	③	④	⑤
20		①	②	③	④	⑤

★この授業について意見があれば、裏面1に、自由に記入してください。

金沢学院短期大学

資料 2

第6回 FD 研修会 参加者アンケート集計結果

第6回 FD研修会アンケート

1. 保健室からみた学生の現状と対処について、感想や質問等をご記入ください。

- ① 単なる怪我や体調不良の学生が利用する以上に色々な悩みを持つ学生が利用していることがわかった。
本来の保健室となんでも相談室の間の役割を担っている場合が多いと感じた。
- ② 病気や怪我だけでなく、心の痛みによる症状が多いことがわかった。
- ③ 様々な症状の学生が一度に来た時の対処の大変さがわかった。
保健室以外での連携を取ることを今後の課題。
- ④ 精神的に弱い学生が増えてことは認識していたが、統合失調症等、素人ではどのように対応すればよいかわからない状態もいることがわかった。
今後の対応等、教職員が共通意識を持つことが重要になるのではないか。
- ⑤ 短大生の心理的問題は、思っていた以上に深いものであると実感した。
特定の学生への対処に追われているのも事実であり、保健室の在り方の難しさを考えさせられた。
- ⑥ 日頃聞けない学生の保健室利用状態を知ることができ、大変に良かった。
過呼吸発作への対処について知ることができた。
- ⑦ 保健室は健康診断の世話、怪我や病気の処置、学生の精神・身体的な相談所として大きな役割をされ、無くてはならない場所であると実感した。
過呼吸の対応は、とても勉強になった。
- ⑧ 精神科病院で働いていた経験より、統合失調症や大うつ病の若い外来患者様が想像以上に多いことは知っていたが、学生生活を送る上では、毎日の細かい心のケアが必要だと改めて感じた。
ソーシャルワーカー（PSW）等が、保健室にいても良いのではないか。
- ⑨ 様々な学生がいること、精神的な問題を抱えていること、対処法等、参考になった。
- ⑩ 現在の学生は我々が思っているより未成熟な部分も多く、時間をかけて対応していく必要性を感じた。
- ⑪ 問題を抱えている学生支援の様子が良くわかった。
現在クラスアドバイザーをしているが、是非連携をして学生に対応していきたい。
具体的な質問は今後、問題点があった時に相談したい。
- ⑫ 精神的に問題があると思われる学生が、授業評価アンケートで様々な事（一方的なことが多い）を書いている。これは、アンケートとしての処理では不都合なことになる。保健室、なんでも相談室との連携が必要になってくると思う。
- ⑬ 現状は理解できたが、対処に関しては、過換気（過呼吸）発作のみでしたので、他の対処のアドバイスもほしい。
- ⑭ 心身ともに病んでいる学生の多さを始めて知り驚いた。
- ⑮ 情報交換は必要。
- ⑯ 学生が抱えている問題の中で解決が難しい事例が少なからずあるように感じている。
こうした事例を一人でも多くの学生が長期的に乗り越えてくれればと思う。
- ⑰ 利用学生延べ数は2006年度以降上昇しているが、実学生数はどうか。
全学生数に対する利用実学生数の割合は上昇しているのか。
1年生と2年生で、保健室訪問学生数は異なってくるか。月別や実学生数ではどうか。

2. なんでも相談室からみた学生の状況について、感想や質問等をご記入ください。

- ① なんでも相談室へ継続的に利用できる学生は幸せな方だと思う。
- ② 自分に自信の持てない学生、人に頼ることが強い学生等やはり心の弱い人で、精神的弱者の相談が多い事がわかった。
以前より利用する学生が大学へ来て、また同じ様に相談にのることがわかった。
- ③ 場面緘黙の学生が入学当初に利用していたことを初めて聞いた。昼食時間は教室を利用しているところを見かけたりする。
在学中に彼女が変化することを願っている。
- ④ 相談室を利用している学生が多数いることがわかった。
必要とする学生が多数いるので、場所を増やすべきでは。
話しをできる場所が増えると良いと思う。
- ⑤ 利用者数は決して多くないものの、学生の拠り所になっていることを知った。
- ⑥ カウンセリングの難しさを実感した。学生は将来ともどもカウンセリングが独立し、自分の足で歩けるようになるのか不安です。
- ⑦ 学生の相談状況を知ることができた。
継続利用の学生へのサポート実例報告は特に興味深かった。
守秘義務がありますが、学生の変化状況をもう少し詳しく知りたかった。
- ⑧ なんでも相談室という名前から、学生生活や精神・身体的な悩みまで、大変広い範囲の相談を受けていることがわかった。
- ⑨ 事例①のA子さんのケースは、私自身「場面緘黙」と接するのが初めてなので、戸惑いと思惑の対応でした。
症例の本を読んだり、児童福祉の職員からアドバイスをもらったり、理解をすることはできても最適な対応が(自分の立場もわきまえて)できたかという、疑問です。
対処方法を学びたいと思う。
- ⑩ 様々な学生のいること、精神的な問題のあること、対処法をどのようにするかなど、参考になった。
- ⑪ 相談室に訪れる学生の実人数の少なさを知り、深刻な学生がいることがわかった。
- ⑫ 毎年、精神的な疾患を抱えている学生が入学するが、それぞれの状況が異なり、指導経験が生かせるわけでもない。
支援する側の心の安定・精神状態の平静を保つことの大切さを感じつつも、自分も人間としてこのような学生の対応に常にゆとりを持って対応できないことも多く、相談室、保健室、他教員のご協力をありがたく思う。
- ⑬ 学部学科別利用者数(P12・図6)の示し方はグラフや表だけでは別の意味でとらえるので、別の記入方法が望ましい。
- ⑭ 相談室の機能を一層高める必要性を感じた。
- ⑮ なんでも相談室を習慣的に利用していく学生ですが、なんでも相談室が出来る以前にもそうした相談がしたくても出来ない学生がいたので、相談室の存在意義は大きいと感じている。

3. 支援を必要とする学生への対応について、感想や質問等をご記入ください。

- ① 本当に支援を必要とする学生とたんなるわがままや無気力のための態度との区別がつき難い。支援を必要とする学生について、学校内での連携がないと知らないままに接してしまう場合がある。
- ② 学内で連携をとるといった木村先生の対応は、良し悪しがある様に思う。情報が学内にいたる所で知れ渡るのはいかがでしょうかと思う。
- ③ 私たち自身が、知識をもって対応しなければいけないのだと感じた。意思、表現してくる学生に話を聞く態度を改めたい。
- ④ 昔はちょっと変わった人と言われ、見過ごされていた性格の人に色々な名前がついて少しの障害とされている。サポートの必要な時どのようなサポートをしたらよいか。詳しく知ることができれば手助けできる機会もできると思う。
- ⑤ 多様な対処方法を学んだ。一人ひとり立場や考えが違うため、すぐに活用できるわけではないが、良い勉強になった。
- ⑥ ADHDと思わしき学生が栄養士の資格を取りたいと修学し、3年目に入りますが、どの様に対応すればよいか、また、対応がうまくいって卒業することが出来ても、創造性の欠如した栄養士を世に出すことに空しさを覚える。
- ⑦ 大学選抜がほとんど無くなった現段階において、発達障害の学生も増えてきていると思われる。教員側において、そのような学生の把握が十分に行われていないため、対処の仕方が共通理解されていない、大学側の支援体制の在り方を検討する必要があるように思われる。
- ⑧ 専門家である先生の講話は、とても勉強になった。
- ⑨ 病気に対しての具体的な症状や特徴、適切な対処方法や理解のポイントを押さえてあり、②の話からの流れ的にとても良かった。具体的に指導があると職員の対応も画一化できてよいと思う。もちろん学生は十人十色なので、深く対応していく場合は、個々の個性に合わせる必要があるが、入口は統一できている方がよいと思う。
- ⑩ いろいろな学生がいること、精神的な問題があること、対処法をどのようにするかなど、参考になった。
- ⑪ 学生の心理的問題に興味を持ち、学生の観察を怠らないようにしていきたい。
- ⑫ これまで自分が行ってきた学生への対応を振り返りながら、拝聴した。反省すべき点が多々あるが、反面非常に悩む点がある。免許に関する教育をする上で、大学では丁寧な細やかな指導、学生の状態を分析しながらの指導をして、免許取得をクリアしても、社会で同じような対応を期待することはできないため、かえって甘やかした指導となるのではないかと考えることがある。
- ⑬ 大変良かった。実際に役に立つと思う。
- ⑭ これだけ多くの障害や病があれば、授業についていけない学生や不登校など、いずれかの障害や病に当てはまるように思う。これからの授業方法を考えさせられた。
- ⑮ 実習作品の公開採点の良(可)否についての見解がほしい。
- ⑯ 本人だけではなく周りの環境の変化も必要な場合もあり、こうした対応に関わる先生方の大変さを痛烈に感じる。
- ⑰ 学生はどこかで自主判断をして自立しなければならない。カウンセリングとの関係をどのようにつけるのか。

4. 第6回のFD研修会では、「学生サポートにおける心理的援助」をテーマに実施しましたが、全体を通してのご意見・ご感想をご記入ください。

- ① 心理的援助を必要としている学生が増えてきているが具体的にどう対応していけばよいかが大変難しい。様々な病気によって常識的な態度がとれないのか、本当に知らないでその様な態度をとるのか判断が難しい。
- ② 連携を取っての早めの対処は、学生にとってプラスに進む場合もあるが、連携を取ることによってプライバシーの流出の問題、学生自身の気持ちを汲み取った連携が必要だと思う。
- ③ 実際、学生と話す機会が多いポジションにいますので、学生にどう対応していけば良いか過去の対応がそれで良かったか等、考えさせられる良い時間でした。
今後も対応していくにあたり、さらに詳しい対応の仕方を学べるチャンスがあれば良いと思う。さらに、短大・大学と区切らず、学生一人の情報を共有できる環境の整備も必要ではないかと(病院のカルテ的なもの)思う。
- ④ 難しい問題であり、守秘義務があることも承知ですが、情報の共有と教職員間の連携は不可欠だと思う。澤村先生、石村先生の考えと、クラス担任の悩みは一致しているのに、協働できていないのは残念だ。
- ⑤ 非常に興味深いお話をありがとうございました。
大学教員が知識の教授のみではおさまらない現実に気付かされた。
- ⑥ 今回のような学生支援の状況を提供する研修会は、大変に有意義である。
情報提供だけに留まらず、全学教員でどう取り組むかの施策を具体化することが大切。
- ⑦ 教職員全員で心理学的な学生サポートをするにあたり、とても有意義な研修会に参加できてありがたい。
学生対応についても具体的にわかりやすいお話があり、これからの対応に生かしていきたい。
- ⑧ とても良かった、また、私自身にとっても日々携わることのできる内容で、大変勉強になった。
教育現場でもやはり第一に大事なものは「学生の命」だと考えている。
「身体と心の健康」を守る勉強ができた研修会であった。
- ⑨ 様々な障害や問題をもつ学生の対処法に関しては素人であり、相談室や保健室の存在は大変ありがたい。両室のさらなる気実を望むところである。
- ⑩ 学生の心理的援助を担当部門者だけでなく教職員一丸となつての対応が急がれ、保健室や相談室に来るような学生が他にくつろげる場所が必要だと感じた。
- ⑪ 今後の学生への支援の仕方の参考になった。
- ⑫ クラス担任・教職員が連携して学生をサポートしなければならぬと痛感した。
- ⑬ 今まで考えていたよりも問題を抱えている学生が多くいるということに驚いた。
- ⑭ 保健室—なんでも相談室—教員(担任)—学生部の連携ネットワークをどのように構築したらよいか。
⑮ 大変勉強になった。
- ⑯ 今回の研修会テーマの設定が大変よかった。
- ⑰ 今後も学生理解に役立つ研修会が必要。方法論より、目的意識の確認。
⑱ 大変参考になった。
- ⑲ とても有意義な研修だった。
御三方の講演はいずれも専門的、具体的で多くのことを学んだ。
- ⑳ 学生の悩みは多岐に渡ることが分かり、対応の難しさを痛感した。

【編集】 金沢学院短期大学 FD委員会
【発行日】 平成21年11月30日